みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

学問の思い出ー中根千枝先生を囲んで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 廣子, 中根, 千枝, 関本, 照夫, 伊藤, 亜人, 清水, 展 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4448

正誤表

頁	段	行	誤	正
10～11	挿入写真2頁目最下段	写真のキャプション	ブラン寺院	・ラブラン寺院
１６	下段	１０	豆腐屋かど、かで	豆腐屋かどこかで・

・印は訂正箇所

學問の思い出

――中根千枝先生を圍んで――

出席

中根千枝

關本照夫（司會）

伊藤亞人

清水　展

横山廣子

○

關本　きょうは中根千枝先生を圍む座談會ということで、中根先生の弟子に當たる四人の者が集まりまして、いろいろお伺いをしようと思っております。

中根先生は東京にお生まれになり、小學校の高學年と女學校を北京で過ごされたわけですね。

中根　小學校に入學したのは東京の杉並第五小學校で、北京に行く前は母の里の岡崎の小學校で、それから北京に行きました。

關本　さらに津田塾專門學校の外國語科を卒業されて、昭和二十二年に東京大學文學部東洋史學科に入學された。私の生まれた年であります。

その後卒業され、大學院に入り、東京大學東洋文化研究所の助手になられる。そのころから、インド、イギリス、イタリアと、長期にわたって外國に留學されているわけですね。そして、シカゴ大學、ロンドン大學等の客員助教授、客員講師を務め、さらに東京大學の助教授（東洋文化研究所）になられ、四十五年に教授、ご定年までずっと東洋文化研究所に籍を置かれて、東洋文化研究所の所長

も務められた。

その間、國内外の諸大學で併任や客員など、さまざまなご經歴がおありですが、一方で、國際人類學民族學連合の副會長を務められ、現在名譽會員。あるいは英國王立人類學協會の名譽會員になられ、米國哲學協會の會員になられた等々、とりわけ日本の人類學と人文社會科學の海外交流のため先頭に立って活躍されてこられた方です。

そして、一九八七年ご定年によって東京大學を退官された。その後も帝京大學文學部教授、中國中央民族學院（現中央民族大學）の名譽教授、農村環境整備センター理事長等々いろいろなお仕事をなさって、一九九五年（平成七年）には日本學士院會員となられました。そして、二〇〇一年には、日本の學術の國際交流に貢獻した功績等々で文化勲章を受けられた。

關本照夫、清水展

中根先生は、東方學會では、一九七六年入會以來會員であられて、一九八五年～八九年まで評議員、八九年～九五年までは理事を三期務められて、それからまた二〇〇一年まで評議員を務め、それから專門委員として國際東方學者會議の委員を二〇〇一年～二〇〇三年まで。東方學會でもいろいろなご貢獻をなさっています。

そういうご經歴で、現在相變わらずお元氣で外國に行かれたり繪を描かれたり、あと何をなさっていますか、先生。

中根　今のところ日本學士院の第一部部長の役目などその他雜事も多いので繪もちょっと今は休止しているのですけれども。

關本　それでは、きょうはまず先生のごく若いころから少し時間の流れを追っていろいろお話を伺って、さらにその後そういう時間の流れに入り切らないような問題についてもいろいろ伺っていきたいと思います。

二　小學校高學年から北京へ

まず皮切りなのですが、私は昭和四十七年（一九七二年）に東京大學大學院の文化人類學專攻に入學しまして、それ以來中根先生の指導を受けてまいりました。中根先生のおられた東洋文化研究所に、ちょうど先生と入れ違いなのですが、先生のご退官のときに、四月一日から助教授で參りました。

中根　ご一緒しなかったわね。していた？

關本　職場としてはご一緒しませんでした。方々で御一緒しておりましたけれども。

關本　先生が戰前、戰中の時代に、北京で若い時代、娘時代を過ごされたことはよく伺うのですが、さてそこでどんな經驗をなされ、どんな毎日を送られていたのだろうか。それが、その後の先生にどう及ぼすものがあったのだろうか、その邊からまずお伺いしたいと思います。

中根　北京に行ったのは盧溝橋事件の一年半後、一九三九年のはじめだったんですね。北京には北京日本小學校というのが一つしかなくて、男女合わせて百人ぐらいだったかしら。それからどんどん日本人が增えだして、その年の四月から女學校と中學校ができるこ

左より　伊藤亞人、中根千枝、横山廣子、

とになったのね。そのために前から北京にいた父に合流したわけ。

それで北京日本高等女學校に入り四年生までいたのです。そして上級學校に行かなければいけないというわけで、私は北京大學でもいいと思っていたのですけれども、父に北京大學に行ったら日本精神を忘れてしまうから、日本の上級學校に行くようにと言われて、それで私たち子供だけ日本に歸ってきたの。だから北京には小學校の六年から女學校の四年生までいたのね。

私は當時北京がとても好きでして、勉強よりも繪を描いたり遊んでばかりいたのだけれども、それで軟派だとか言われて。

内地からはずい分優秀な先生方がいらしたんですけれども、私のことを「何て大陸的なお嬢さんだろう」なんて言われてしまってね。それでもたいてい級長なんかやっていました。修身や國体の本義などの時間が退屈で、あるときつまらない、つまらないと思っていて、つい聲に出してしまって「つまらない」と（笑）。そしたら先生にしかられちゃって級長を罷免されたの。そんなこともあって、まじめでない生徒だった。

そのころの北京で私が思い出すのは、北京に行く前から私は大陸の奥地に興味があったのね。小さいころ『少年倶樂部』の山中峯太郎の小説なんか讀んでいたの。

北京に行って、ある日學校から歸ってきたら、うちの前にラクダが二頭座っているのね。あっ、砂漠の方から來たんだなと思って。そのころ北京では、ストーブ用の石炭などを運ぶのにラクダ使っていたのね。有名な老舎の『駱駝祥子（ルオトーシアンツ）』という小説もあるでしょう。そのとき、北京から奥地に行けるのだなと思ったのね。

日本は戦時にだんだん向かっていったんだけれども、そういう空氣がまだなくて、北京は開放的でのんびりしていて。そして中國人の社會も、お金持ちで教養のある層と、それから路傍で死んでいくような貧しい人、そういうすごい違いがあるんで、それにまず驚いたわね。

こういうかわいそうな人をどうすればよいのかなんて初め思ったんだけれども、餘り多いから、これはどうにもならない、そういう氣持ちになってね。こういう社會というものがあるんだなという、肯定的というか、左翼的にはならないでしまったのね。

歸國して大學へ

中根 それから、北京の女學校は、內地の學校と比べて程度が低いから、日本の上級學校に行けないというわけ。それで、最後の學年に東京に歸って、私は叔父の家に世話になり、府立第八高等女學校（今の八潮高校）に轉校しました。

一クラスだけ受驗クラスというのがそのころでもあって、その受驗クラスに入ったら私は數學がおくれていて、はじめは少し苦勞しました。それから上級學校はどこにするかということ。そのころスウェン・ヘディンの本なんか讀んでいて、單なる冒險よりもちゃんとした研究をベースにした方がいいということがわかっていたから、そういうために勉强をしなければと思うようになって。

しかし、大學といっても、そのころ女の子には女高師とか女子大とか津田とか女子醫專とかそれぐらいしかないのね。だからしようがないな、どこも中央アジアをやっていないから、とにかく英語を勉强しておけば將來の役に立つと思って、津田へ行きました。

津田の二年生のとき、終戰になって、東大が女子も受け入れるということになったのね。一年あるから準備できると思って、東大を受けることにしたわけね。そしたら、みんなが、男の子ってすごく頭がいいから受かるはずないというわけよ。だからやめた方がいいと言うの（笑）。

私たちは小學校のときは男女共學でも、その後ずっと男の子と一緒に勉强してないわけでしょう。だから男の子がどのぐらい頭がいいのか、だれもわからないわけ。それでやめようと思って、それならしようがないから、後で外國へでも行ったらいいと思ったの。

そのときに堀一郎という先生が、後で東大の先生になられるのだけれども、津田に講師でいらしたの。私、堀先生に、「みんなが男の子は頭がいいから、だめだと言っています。だから東大を受けるのはもうやめることにしようと思います」と言ったら、堀先生が「そんなの落ちてもともと、受かればもうけものじゃないか」とおっしゃって。あ、それもそうだと思って、それで思い返して東大受けることにしたの。

伊藤 そのときは、堀先生は、もう東大にいらしたのですか。

中根 まだ東大じゃないの。

伊藤 東北大ね。

中根 その前でね。津田に講師でいらして、日本史の一部分を教えてらしたの。

伊藤 堀一郎先生の授業は僕もとりました。

横山 宗教學の。

中根 その先生の講義がおもしろくて、よく聞いていたの。それで堀先生のおうちに遊びに行ったこともあったのね。

關本 成城のお宅へ。

中根 うん。それでそのときに先ほどのように「入ったらもうけものじゃないか」とおっしゃるから、それじゃあもうけものがあるかもしれないからやってみようと思って。そして西洋史だとか日本史とか、津田で教えない受驗科目がずい分あるわけね。今よりずっとやさしかったんだけれども。そういう科目の本を買ってきて自己流で勉强していたの。そして試驗受けたら、私がおもしろいなと思っていたことがちょうど試驗問題に出たのね。

關本 それは何の試驗問題ですか。

中根 歷史だったわね。莊園制に關する問題でね。そして、多分英語でも點稼いだかもしれないわね。みんな英語していない時代だから。工藤（篁）先生も課外授業の講師でい

らして。

關本　津田塾に。

中根　漢文というよりも、中國語で讀む詩の講義だったのね。そしたら工藤先生に教えていただいたうちの一つが試驗に出たのよ、また（笑）。だから、あ、この調子なら受かるに決まっていると思った。運がよかったのね。

それで東大の學科をえらぶとき、中央アジアに行きたかったから、中央アジアをやっているのはどこかと探すと、東洋史だったのね。それで東洋史をえらんだんです。

東大東洋史學科に入ってからチベット研究を目ざす

中根　東洋史に入ったら、中央アジアやろうと思っているのに漢文の文獻ばっかりなのね。津田では漢文なんてやっていなかったから、つまらないなと思って。それでも同僚とか先輩がとても親切に教えてくれて、いろいろ文獻にも少し親しくなった。

中國語學の倉石（武四郎）先生の講義にも出たんです。そしたら、ああ、これならまだいいと思ったの。だって東洋史はもう完全な漢文なの。だけど倉石先生は中國語でずっとお讀みになるのね、（返り點で）ひっくり返らない。それがとてもうれしくて。それで倉石先生には私とても好感を持ててね。工藤先生には津田のときに教わっただけでしたけど。

そして、中央アジアをやろうと思ったら、いろいろな言葉をやらなきゃならないのね、ペルシャ語とかアラビア語とか、ロシア語とか何か。それみんなやらなきゃならないというので、一應みんな學内外のレッスンを受けたのね。そしたら、ペルシャ語の先生は榮養失調で亡くなってしまたり、ロシア語のためにニコライ堂に行ったら、いつも官憲がいるのね。ちょっと嫌になって、またむずかしいのでやめてしまった。

關本　三笠宮様とはどのようなご關係だったのですか。

中根　三笠宮様は、たしか西洋史に籍をおかれていて、歴史概説の講義なんかでよくご一緒になりました。初め三笠宮様って知らなかったの。そしたら、その人が入ってくると、先生が最敬禮していらっしゃるのね。そしてその方がどこかの席に座ると、その前や横の人がぱーっとどくのよ（笑）。

そのうちに、私の横にお座りになったのね。私は知らないからそのまま座っていたの。それでそのうちに宮様だということがわかって、もうわかるのが遅かったからおかしいんだけれど。

よく公務などでお休みになったりするとノートを貸して差し上げたり、そして私がお寢坊でおくれると、宮様がここまでもう濟みましたなんてノート見せてくださったり。そんなふうにして、宮様とはお親しくなりました。

話を戻すと、東洋史は漢籍が中心でしょう。そのほかにいろんな語學も習わなければいけないから大變だとわかってきたと共に中央アジアをいろいろ研究してみると、チベットがよくわかっていないとわかったのね。チベットの方の研究というのは、中央アジアと比較してとても少ないわけ。それに中央アジアはそんな具合にたくさんの言葉があるからちょっと敬遠して、チベットをやろうと。

チベット語の授業は多田等觀先生という、チベットのセラ寺院に長くいらした方が教えてくださるんだけれども、すごい東北辯なの（笑）。それで私、これじゃチベット語も東北辯になっちゃうと思って、やはりチベット・ラサに滯在された青木文教先生の門をた

たいて、教えて頂くことにしたのです。

關本 青木先生はどこにおられたのですか。

中根 CIEという、アメリカの文化部（GHQ幕僚部の民間情報教育局）。

關本 占領軍のですね。

中根 青木先生は發音はいいんだけれども、多田、青木兩先生とも大谷光瑞師の關係で二人ともお坊さんなのね。だからいわゆる學術をベースにしていらっしゃらないわけ。大學院に入ったころにジュゼッペ・トゥッチ（Giuseppe Tucci）という先生のすごい本（*Tibetan Painted Scrolls*, 3 vols, Rome, 1949）が出たんですよね。大きな版で厚くて、それが三册なの。チベットの歴史も文化もすべて含んでいる。その本は、ちょうどそのころ自動車一臺と同じ値段だったのね。東洋文化（研究所）で購入されていて、これこそ私の勉強するものだと思って。

それからもうひとつ、ジョージ・ルーリッヒ（George N. Roerich）というロシア人の先生で、インドにいらして *The Blue Annals* という、チベット語の有名な佛教史の本の翻譯（Part One (1949); Part Two (1953), Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta）が出たの。ルーリッヒ教授というのは、有名な画家のお父様と一緒にチベットを縱斷した探檢家でもあったの。トゥッチ教授もチベットに滯在して調査されており、お二人ともチベットについて最高の文獻學者である上に、チベットの實情を熟知されている理想的なチベット學者で、このお二人こそ私の師事すべき先生だと思ってね。

ルーリッヒの本は私自身で購入し、助手になった早々出版社氣付で、「ぜひ先生にチベット學を習いたいから、教えていただけますでしょうか」と手紙を出しましたら、「インドへいらしたらいつでもお教えします」と返事が來たのね。若いから平氣で紹介もなしにそんなことやったんだけれども。とても嬉しくてね。

そしてちょうどそのころインドと國交が成立していて、インド政府はすぐ奬學金制度を始めたのね。それで第一回は荒松雄さんがいらして、その次の年（一九五三年）に私。ルーリッヒ先生から返事があったから絶對に行こうと思って。それに中國からはチベットへ入れないわけね。だからヒマラヤ越えて行く方法があると思って。とにかくインドへ行こうと思って。政府の試驗を受けてインドに行くことになったんです。

人類學との出會い

中根 最初は中央アジアに興味があって、それからチベット研究になったわけ。人類學をしようと思った理由は、もともとは人類學という言葉も知らなかったんだけれども、東洋史が中國中心で、中國の專門家はたくさんいるわけだけれども、彼らが持っている中國のイメージというのが、私が北京で知っている中國とか中國人とかけ離れているわけね。文獻だけでやっているから。日本製の中國になっているわけ。それで私は、チベットも、チベットに行かないで本だけで勉強しているとそれと同じ感じになってしまうんじゃないかと思って。これはもう生きた社會を知らなきゃいけない。

生きた社會を知る學問は何だろうと調べたら、人類學というのがあると。じゃ人類學をやらなければいけないと思って、そしたら人類學は理學部で文學部ではない。で、理學部へ早速聽講に行きましたら、須田（昭義）先生という方が體質人類學を教えていらして、それから杉浦健一先生という方が土俗學を教えていらした。その二つの講義に出ているう

ちに人類學科の學生であった祖父江孝男さんと知り合いになったの。杉浦先生がアメリカで今、ものすごく文化人類學が發達しているから、君、占領中だから、CIEにたくさん本が來ているから、そこへ行って少し勉強したらいいだろうとおっしゃって。早速また日比谷にあったCIEの圖書館に行ったの。そしたらいろいろあるのだけれども、文化人類學といってもみんなイロコイだとか、アメリカインディアンの研究が主なの。だからちょっとチベットとは合わないから、これは困ったなと思って。とにかく文化人類學というのはどういう學問か知ろうと思って、ある程度勉強したのね。

ちょうどそのころ、日本には民族學という學問があって、民族學會の集まりがあった。

關本　エスノロジーですね。

中根　そう、エスノロジー。それでその集まりが時々あったわけね、民族學協會というのが。そこへ學生で行ったら、數人がいつも集まっていて、いつも眞ん中にボス猿みたいな人がいるわけ。須田先生に、「あの人一体だれですか」と聞いたら、「君、知らないの。あれは岡正雄だよ」と。ああ、あれが岡先生だと思ってね。それで民族學會というのを知るようになったのね。

石田（英一郎）先生もいらしたと思うわね。岡先生も石田先生もウィーン學派だから、文化の傳播とか民族誌的な分布などに關心があって、これもちょっと私には合わないなと思って。

關本　當時、石田先生は、東大にいらしてはいないのですか。

中根　まだ東大にはいらっしゃらない。

關本　（石田先生とは）どこで最初にお知り合いになったんですか。

中根　その民族學者の集りで。

伊藤　先生が大學院にいらしたときですか。

中根　そうね、そのころ。杉浦先生が土俗學を教えていた。だから一番最初、杉浦先生とか須田先生を知ったわけ。それから、そのほかの民族學者たちを知ったわけ。

當時、東洋史の山本（達郎）先生と江上（波夫）先生は民族學に關心を持っていらした。それでつながったのね。だけど山本先生は安南史で、江上先生は蒙古史でしょう。だからちょうどお二人の眞ん中をすることになってしまったのだけれども、私がしたいということをよくおわかりになって。だから東洋史では、とてもお二人にお世話になりました。

東洋文化研究所の助手となる

伊藤　先生、卒業論文は、どういうテーマですか。

中根　卒業論文は、チベットに關心があるようになったころで、漢人地帶とチベット人地帶の接觸地帶、唐代における吐蕃と唐の關係、卒論はそういうものだった。卒業のころは、もうチベットにシフトしていたのね。

伊藤　修士論文は。

中根　そのころ修士論文ってないのよ。素敵でしょう（笑）。旧制は修士号なんて出す制度じゃないから。

關本　博士号も出なかったわけですね。

中根　そうそう。

關本　じゃあ大學院生は論文書かなくてよかったのですね。

中根　そうよ。論文は書いていたけれど、とくに修士をとるためというのではなくて。

關本　幸せですね。

中根　だから、論文は資格をとるためというより、就職のときに參考になるという具合で。そのころ辻直四郎先生というサンスクリ

ットの大家がいらっしゃって、その先生は文學部長と東洋文化研究所長を兼ねていらした。私は辻先生のサンスクリットの講義には出てましたが、とてもむづかしくて試驗は受けませんでした。それでも文學部長室にいって、辻先生に、「先生、東洋文化（研究所）にぜひ入りたいのです。お願いします」って言ったのね。そうしたら辻先生は、「承知しました」とおっしゃったの（笑）。そして、結局入ったのね。

後で教授會で反對がずい分あったって。女の子なんか入れたら、訓練してもお嫁に行っちゃうからむだだという意見が。そしたら辻先生が、「中根さんに限ってそういうことはありません。私が責任持ちます」とおっしゃったという話です。だから辻先生にはもう感謝、感激よ。東大で初めての女性の助手だから、抵抗があったらしい。辻先生がいらっしゃらなかったら、とても危なかったと思う。

伊藤　私が助手になるときも、偶然先生のところに立ち寄ったら、「きょうが締め切りよ」と言われて。

中根　そうそう。

伊藤　「書類なんか要らないわよ」と。それで中根先生が荒先生呼んで、「現物がいるのだから間違いないわ、私が保證しますよ」と言ったら、「わかりました」と言って（笑）。

中根　そうだっけ。

伊藤　だいたいそのような話です。

清水　僕はちゃんと書類を出して（笑）。すごく厳しい面接審査を受けて、怖かったですけれどもね。

中根　時代がだんだん厳しくなるのよ。

インドへ

中根　それで東洋文化（研究所）に入って。

關本　東文研は昭和四十年に本郷キャンパスの現在の場所に移りますが、その頃は大塚にあったのですね。

中根　そう、大塚に。そして一年後にインド政府の試驗受けて、昭和二十八年の六月にインドに行ったわけ。

關本　すぐインドにいらっしゃったですか。

中根　そう、一年やっただけなの。そしてインドではどうしてもヒマラヤを越したかったから、ルーリッヒ先生がカリンポンという國境の町に住んでいらして、私もタゴール夫人の別荘の一部を借りて住んで、山道を傳って先生のお宅で個人教授をずっとお願いしていたのです。

同時に、さっきボス猿と言っていた岡先生が親切で、インドのカルカッタにある政府の人類學研究所のB・S・グハ（Biraja Sankar Guha）所長に、こういうのが行くから頼むと言ってくださったの。だから人類學研究所に屬していながら、同時にルーリッヒ先生がいらっしゃるからカリンポンに半分ぐらい住んで、そしてチベット文獻について勉强していたわけです。

人類學研究所はたくさん人類學者がいて、日本よりもずっと進んでいたのね。というのは、英國の植民地だったでしょう。だから英國やスイス、ドイツ、イタリアなどから來ている民族學者などもいて。ベリア・エルビン（Dr. Verrier Elwin　民俗・民族學者）など有名な學者もいたし、それからインド人の体質人類學者たちは、グハ所長をはじめ大抵ドイツに留學していたのね。だからずい分活潑だった。日本の民族學會のような小さいんじゃなくて、それも政府の研究所だから、カルカッタのメインストリートのチョウリンギー通りにある博物館の大きな建物の中にあっ

て、とても立派でした。

そこから未開民族調査隊が出るのね。それに加わっていったらいいと、そのグハ所長がおっしゃるので、一緒に行ったんです。それは私にとって初めての未開民族調査で、アッサムの南のトリプラ州というところだけれども、とてもおもしろい經驗だったんです。

研究者は數人だけど、サーバントも數人ぐらい。インド式なのね。調査に行くのにサーバントとコック連れていくわけ。そしてまず飛行機で行って、そこからジープで奥地へ入って、ジープが進めなくなると今度は水牛を雇って、テントなど荷物を全部それに積んで。そして現地に着いてテントを張ったりするのは、みんなサーバントがやるの。人類學者はのんびりして、お茶でも飲んで話しているのね。遠いから大抵夜着いちゃうんですよね。ずい分たってからサーバントが、眞夜中ぐらいに、「お食事の用意ができましたから」と來る。

この經驗をとおして、そういうところへ行って、どういうふうにしたら調査ができるかということは知ったのね。もちろん食料とか何かは要ることは確かだし、それから紙が全然ないということを初めて知ったわ。トイレットペーパーはじめ、書く紙なんか、全然紙というものがないから、紙は持っていかなければいけないとかね。それから折り疊みベッド。今のようなしゃれたベッドなんてないから、木製の折り疊み式ベッドとスリーピングバッグとか、それから寒くなるから薄い布團やシーツとか、そういうのが全部要るということが、みんなと一緒に行ってわかったわけです。それはとてもいい經驗だったのね。

越えられない國境を前に

中根　それから、同時にカリンポンにいたときに、私と同世代のチベットの貴族のお孃さんたちが何人もいらして、お友達になっていたのね。そのころはまだ、チベット人にとっては、國境は自由に往來できたのね。チベットのお孃さんたちが、「私たち毎年行き來するからご一緒にいらっしゃいよ」と言うのね。顔も餘り變わらないし、チベット地域だったらわからないというわけ。だからしめしめ、こうしたら行けるかと思っていたの。

そしたら、カルカッタの總領事が、どうも私がチベットに行きたいというのを知ったらしくて、「中根さん、國境は絶對越えないでください」と言うわけ。やはり國境を越えたら問題になるのね。そう言われちゃったから、じゃあしようがないなと思ってあきらめて、國境近くのシッキムなんかで調査したりして。

一度調査團と一緒に行ってからは、自分の研究をしたいので一人で行くようになったんですね。そのときは、簡單にポーター二〜三人とコックだけ連れて行きましたけれども。そしてシッキムのブーティアやレプチャとか、アッサムのナガ族などを調査してました。

カルカッタの人類學研究所では、天井の高い大きい部屋に四方に机が置かれて、四人の人類學者の研究室になっていたの。そこで一緒になった一人が、以前にダッカ大學の教授をしていて、後でカルカッタ大學の教授になった方だけれども、インドとパキスタンの分離でカルカッタに亡命していらしてこの人類學研究所に入っていらした。

その方がすごい教養のある、ベンガルのブラーマンで、何しろ祖先から千年もプロフェッサーをしていたという人なの。そういう意味でインド的で、とても魅力的で、もうインドの文化の粹みたいな人で、その方がいろいろインドのことをときどきお話ししてくださ

って。あるとき、私が「インドは歴史記録が乏しいからちょっと不便じゃない」なんてうっかり言うと、「歴史なんかに拘泥するというのはつまらないことじゃないか。歴史なんかに拘泥しないインドは何とノーブルな國だろう」と言うのね。そういう反應の仕方で、私が常識的なことを言うと、大抵インド的な考え方とか文化で答えてくださって。そのうちに、私はとてもインドに興味を持つようになったのです。

伊藤　その方は何とおっしゃるのですか。

中根　バタチャリア（Asutosh Bhattacharyya）というの。バタチャリアというのは、昔プロフェッサーということなのよ。バタというのは食事ということで、チャーリアというのは與えるということなの。インドの大昔からの習慣は、偉い學者が出ると、みんなが尊敬していろいろお米だの野菜だのを持ってくるのね。だからプロフェッサーの家というのはいっぱい食料がある。それから、弟子たちは遠くから來るから、爲替なんかないころだから、先生が弟子たちに食事を與えながら教える。だからバタ・チャーリアというのはプロフェッサーということ。

そのカーストの人でいらっしゃって、いかにもプロフェッサーらしくて、私、世界であんなプロフェッサーらしい人を見たことがないというような方だったのね。すごくユーモアもあって、先年亡くなられたけど、とてもいい方だった。その上ベリア・エルビンと共に四年間もフィールド・ワークを共にしたというだけあって、英國式アプローチにもなれていらして。

その方を通して、その方のお知り合いと、ヒンドゥーの村へ行ったり、ヒンドゥーのコミュニティを研究したりした。もう國境を越えられないから、インドで本格的に調査をするようになり、他方ルーリッヒ先生からチベット學を學ぶのと、ずい分忙しかったのね。

スウェーデンの財團から助成を受ける

中根　インドのスカラーシップは二年。二年たって、いよいよ日本に歸ることになると思っていたところ、たまたまYWCAの、私の隣の部屋に、スウェーデンの初老の女の方がいらしたのね。私はちょうどナガ・ヒルからカルカッタに歸ったばかりで、もう泥だらけのものや調査の道具なんかを部屋いっぱいに廣げていたんだけれども、その方がノックしていらして、「ちょっとお話を聞きたい」と。いろいろ私の研究のことを聞かれて。

その人は人類學者じゃなくて、後でわかったんだけれども、スターリン賞を受賞された醫學博士（Dr. Andrea Andreen）なの。だから私、こんな人類學者でもない人に調査のこと言ったってしようがないなと思って、ちょっと不機嫌な答え方をしていたのね。そしたらその人が、「ずい分いろいろ研究しているんですね。スウェーデンでも財團からの助成金というのがありますから、そういう可能性があると思いますよ」なんておっしゃって。

そうしたら廊下をへだてて私の部屋の前の部屋にインド人の植物學者がいて、「あの、ちょっと注意した方がいいわよ」と言うのね。「あの人は、人の部屋に來ていろいろ話をして、歸るとパンパンパンとタイプライターを打っているから、スパイかもしれない。注意した方がいい」と言うの（笑）。それでスパイかしらなんて言っていたのだけれども、そんな悪い感じもしなかったのね。それから半年ぐらいたって、スウェーデンのエリン・ワグネル財團から突然電報が來て、あなたに助成金を出すことにしました。私は何も書類を出していないのよ。その女の方が私の

ご自宅にて　2006年5月

偶然お會いした東洋史の先輩方と
（左から、荒松雄、三上次男、私、榎一雄、ニューデリーで、1954年）

ヒマラヤ山中、シッキムのチベット佛教寺院にて（1955年3月）

調査した大家族チャクロバティ家の、その四人兄弟の妻達と（左から2人目が私、カルカッタで、1965年8月）

ファース・セミナー同門の費孝通教授と（北京で、1979年9月）

チベット六大寺院の一つで、六學部からなる大學の體制をもつブラン寺院にて。その圖書館の藏書は最も完備し、高名な學僧を輩出したことで知られる。（1984年6月）

ことを聞いて、それこそタイプを打って出したんでしょうね、それだけなの。

それで後でわかったことは、ストックホルムにその方の報告が行って財團で審査が行われているときに、たまたま茅（誠司、東大）總長がストックホルムにいらしたのね。その財團のメンバーにウプサラ大學の總長がいらして、茅先生に東京大學の助手で中根さんという人がいるけれども、「この方は優秀ですか」と聞いたのだって。そうしたら私のことを當然知らないはずなのに茅先生はすごくて、「とても優秀です」っておっしゃった（笑）。それで決定されたというの。昔っておかしいわね。今では考えられないこと。

その財團の助成は女性の研究者に出すというもので、先方からはインドで女權制の社會について研究してくださいと書いてあったの。だから私、女權制はありませんけれども、母系制ならありますから、それでいいですかと書いたのね。そしたら結構です、どうぞと言うの。たまたまそのとき社會學者のアルバ・ミュルダル（Alva Myrdal 有名な經濟學者のグンナー・ミュルダル（Gunnar Myrdal）の夫人）がインド大使で、あなたのスーパーバイザーになりますから、と知らせて來たのね。それで、インドでまた一年。母系制のカシ族とガロ族、それから南インドのナヤールと、調査研究して、一年。

横山　母系制の調査に行かれた時、それまでのアッサムとかシッキムで調査された時と、ストックホルムからの奬學金である程度テーマが限定されてガロヒルに行かれた時とでは、先生ご自身の調査は大分違っていたのですか。

中根　ええ。カシやガロはナガ族とかティプラの民族と基本的に同じですし、他方ナヤールというのは上流カーストで、自家用車で出迎えてくれたり、おいしいお食事をいただいたり。ナヤールは全然違いますけれども、ガロ、カシはナガ族と非常に近いですね。

横山　調査では kinship を中心に見ていらしたのでしょうか。

中根　そうでもない。まだよくわからないその社會構造を明らかにすることですし、それからナヤールの場合は法律家の報告が多いけれども、人類學的にナヤールの存在のあり方というのは明確でないから、kinship もあるけれども、階層とか變化のプロセスなどいろんなものがある。

（調査が終わって、）いよいよこれで今度こそ歸れると思っていたら、財團からもう一年出すから研究してくれというの。それで私インドに續けて三年もいて、「私はもうずい分インドにいて調査研究したから、今度は論文を書きたいからヨーロッパに行きたい」と言ったの。そうしたら、OKと言うわけ。その頃（一九五六年八月）ちょうど、アムステルダムで世界社會學者大會が催されることになっていて、ミュルダル大使がその一つの責任者でいらしたの。この社會學者大會で研究發表をするようにとのことで、ガロ族の社會組織についてそこで研究發表して、それからストックホルムに行ってどういう研究をしたかということを報告したわけ。そして、今度はヨーロッパで論文書きたいと言ったわけだったの。

私としては、多分ストックホルム大學なんかで論文書くようになるだろうと思って。そしたらウプサラ大學のシーゲル・シュタット總長が財團のメンバーにいらして、スウェーデンはまだ人類學がそんなに發達していないから、世界で今一番いいのはロンドンで、レイモンド・ファースのセミナーというのがあるから、そこへいらっしゃいと。紹介狀を書いてくださったから、それでロンドンのファ

ース教授のところに行った。

清水　ロンドンに行く前に、ガロとカシの調査は、スウェーデンの奨學金で。

中根　インドで一年やっていました。

清水　一年やっていらしたのですか。

中根　後でファース教授が「日本人でインドで研究して、スウェーデンのお金で來た學生って、一體どういう人だろう」と思ったとおっしゃったけれどもね。

ロンドンのファース教授のセミナー

中根　それでロンドン大學のＬＳＥ（London School of Economics）で十月からはじまったファース教授の大學院のセミナーに出た。十人ぐらいいて、いろんな國から來ている。いろんなところでフィールドワークを濟ませた人ばかりで、フィールドワークをしていない人はそのセミナーに入れないのね。ちょうど私はインドで行ったから、資格があったのでしょうね。そこへ入れてもらって、すごいいいセミナーで、アメリカでもそのころレイモンドのセミナーに出たかどうかとみんな言っているぐらいだったのね。

關本　ロンドンのファース先生のセミナーに、一緒に出ていたほかの學生さんは、どんな方がいましたか。

中根　あのときは、ニュージーランドとかオーストラリアとかマレーシアとか、もちろんアメリカからも二、三人いましたね。ベネディクトとかランカスターとか、イギリス人なんていうのはいろんな國の人たちがいてその一つみたいになってしまうわけ。イギリス人はそんなに多くない。イギリス人って、オーストラリアとか前の英領植民地に就職していったり、必ずしもずっとイギリスにいなかったりするけれども。

關本　カリフォルニア大學バークレー校にいらしたベネディクトさんもそのときの學生さんですか。私があちらにリサーチフェローとして滯在していたときはお世話になって、おしゃれな方でしたね。

中根　そうなんです。それからファース先生が「君のようなのは、リーチとディスカッションした方がいい」と言って、それでケンブリッジに送ってくださって。

關本　どういう意味ですか、君のようなのはというと……。

中根　ビルマの『ハイランド・バーマ（*Political Systems of Highland Burma by* Edmund Leach, 1954, London）』をインドで讀んでいましたし。それからビルマと言ったらチベットに近いし、イロコイ族や何かとは違うわけよね。だからとても興味持っていたし。

横山　『ハイランド・バーマ』は、もうインドの人類學者たちがやはり注目していたのでしょうか。

中根　注目というのではない、少數ですが外國人の人類學者が問題にしていましたね。そういう本はカルカッタのオックスフォード・ブックショップに行くと大抵あるわけよ。あれは植民地のよさね。

横山　五四年ぐらいに出たと思うので、もう出たすぐ後ですよね。

中根　出たばかり。そのころ調査するときは、*Notes and Queries of Anthropology* というの、その六版かな、一九五一年に出たのが、それもカルカッタの本屋で買って、とても參考になったわね。

ロンドンでファースのすばらしいセミナーに出席して、すごく興味がわき、ああ、これが私のしたかったことだということに氣がついて。

そのセミナーに入った初めのころ、出席者の一人から「あなたは文化人類學をなさるの

ですか、社會人類學をなさるのですか」と言うのね。そのころまだ私も文化人類學と社會人類學の區別がつかないわけ。それで、さあと思って。そのセミナーに出たら社會人類學というのがだんだんわかり、アメリカのとずい分違うというのがわかってきて、ああ、私がしたかったのは社會人類學だった、研究というのは何ておもしろいことだろうと思って。それまでは私、學者になるという氣持ちは餘りなかったのね。

關本　何になろうと思ってらっしゃったんですか。

中根　初めは特派員か何かになりたいと思っていたの。ファースのセミナーに出席して、研究ということに本格的に興味をもつようになったの。日本の社會科學では、著名な歐米の學者たちが提示した理論を參考として、またそれに依據して、自分たちの問題を考察するというアプローチが常だけど、ファースのセミナーでは緻密なフィールドワークを前提としたいろいろ異なるデータからどのように理論をくみたてていくかというプロセスが、何よりも重要な位置付けになっている。一人の發表者が自分のデータにもとづいて理論化に向う說を出そうとすると、他の參加者がそれは自分のフィールドには該當しない。なぜなら……。といった調子でクロスチェックがさまざま行われ、先生から嚴しい批判があったり、より納得できる立場を提示されたりするわけ。こうした生き生きとした研究のプロセスを學んで、これは一生研究する對象として素晴らしいと思って、それで初めて社會人類學者になろうと思ったのね。

そして、その年の暮に、今度はさっき言った大きな本を出したイタリアのジュゼッペ・トゥッチ先生が、イタリア・ローマの中極東研究所（ISMEO: Istituo Italiano per il Medio et Estremo Oriente）の所長で、お招きがきたのです。後で聞いたら山本達郎先生が私の知らないうちにアレンジしてくださったのね。今度トゥッチ先生のところにいらしたらいいでしょうと。それでロンドンからトゥッチ先生のところに行って、ローマのトゥッチ先生のご自宅で個人教授を受けて半年。そしたら文部省なのか大學なのか忘れてしまったんですけど、もう四年にもなるのに、歸るのか、歸らないのか。身分が助手でしょう。だからもし歸らなければこれで助手を打ち切ると通告がきたのです。これは大變だと思って。

關本　四年目まで待ってくれたらいいですよ。

中根　それで、私が四年も外に出たので、それからは海外出張は二年までで、その後は休職とか何かすることになったの。それまで大學は、こんな變な助手が出るとは想定外だったのね。

關本　中根先生のせいで（笑）。

中根　そういう通知が來たんで、これはやはり歸らなきゃと思って。それで「歸ります」と言ってエジプト・ギリシャ・インドなどによって歸ってきたのです。

清水　四年間の間、一度も日本に戻られなかったのですか。

中根　全然。

清水　インドからイギリスに行かれてイタリアまで。

中根　そう。だって暇がなくてね。その間論文も書いていたし、先生や友人に惠まれていて。ローマに行く途中、パリによって、レヴィ＝ストロースに會ったとき、ガロとカシについて本を出すようにとすすめられ、これが後にパリから英文で出版した *Garo and Khasi: A Comparative Study in Matrilineal Systems* (Paris, 1967) になったわけ。次々

に學びたいこと、論文作成のアイディアもあふれるように出てきて、歸國したいという氣もしなかったの。

日本の學生に人類學を教える

關本 それで先生はまた東大に戻られて。

中根 そうなんです。そして半年たったら講師に。ちょうど文化人類學ができていたのね、一年前に。それで石田先生とか泉先生がいらしたんだわ。それでちょうどいいのが來たというんで、すぐ教えるようにと言って。

大學院のセミナーで、私感じたのは、ファースのセミナーはみんな全部それぞれフィールドワークしていた人ばかりでしょう。ところがフィールドワークの前の人たちだから、同じようなのはできないわけよね。だからみんなフィールドワークなしでよくこの本讀めるなと思って感心して。私はフィールドワークする前は、人類學の本なんか讀んだときに退屈していたのね。フィールドワークしてからものすごく讀むのに興味が出たし、バーッと讀めるようになったの。だからみんなフィールドワークなしでよく勉強しているなと思った。だけど、そのころあなたたち教養課程で一番成績のいいのが來たから、だから勉強家で頭はよかったのよ。

關本 まだ大分先でしょう、我々が授業で教えを受けるようになるのは……。

中根 講師になって、初めは教養學部で教えていて、それから大學院で。それで紛爭があって、貴方たちが來たのはその後だったのね。その頃はもう教授で、大學院で指導教官などしてたわけ。

横山 フィールドワークをしていない學生に教えるに當たって、先生がこんなことを特に工夫しようかしらと思われたようなことはあるんですか。フィールドワークもわからずに、ともかく讀まなきゃならない學生たちに對して何か。

中根 本當大變だったと思う、私同情していたもの（笑）。それで本の讀み方が、例えば私がファースとかリーチなど、實物を知っていると讀み違えというのはほとんどないわけよね。だけど、英語だけで讀んでいくから、ちょっと想像できないミスを犯したりするのね。そういうの、難しいわね。どうしてこういうふうに讀んではいけないかというのを教えるのは。だから本を讀んでも人の考え方を知るというのとはずい分違うわけよね。學者とか講義をするなんて嫌いだからで、教養でも講義をしなきゃいけないというから一應はしたんだけれども。興味があったのはやはり大學院だわね、それぞれの考え方を交流するから。

關本 大學院の先生のゼミは樂しかったですよね。

中根 そう？

關本 はい。教養學部の文化人類學では共通科目「文化人類學」なんていう授業をなさって、ちょっと退屈でしたが、大學院に進んで先生のゼミは、實に樂しかったです。私が大學院で先生のゼミに出るようになったときも、もちろん別にどこかでフィールドをして歸ってきたというわけでなくて、これから勉強するところですし、周りの人間もそうなんですけれども、ゼミというのは不思議に先生によって話がおもしろくなるかどうかというのが決まるんですよね。ゼミではおもに學生がしゃべるのに。あれは感心しました。

中根 優秀でしたよ、皆さん。紛爭の後だから、人數もちょうどよかったのね。

關本 最近の大學院は、政府の大學院重點化政策で大きくなり過ぎまして。

中根 そうでしょう。大き過ぎてもいけないし、小さ過ぎてもよくないのね。

清水　略歴年表を見ますと、先生の戻っていらしたのは昭和三十三年で講師になられてますね。

中根　そうよ、學生と餘り違わないの。教養の事務室に行って、來週休講にしてほしいんですと言ったら、「學生の掲示は向こう」なんて（笑）。「學生じゃないんですけど」と言って、そんなふうだったの。

清水　戻ってらした頃から、そろそろ世界の人類學會を日本で開こうなどという動きが、出始めたころでしょうか。

中根　そうね。民族學のグループの人たちが前から運動してたのよね。

初め、東大に文化人類學ができるとき、杉浦先生をと豫定していたところ、亡くなってしまったのね。それであのころどこにいらしたのかわかりませんけれど、石田先生がいらして、それからボウルス（Gordon Townsend Bowles）さんという、アメリカの人類學者が來て。

關本　何大學といいましたっけ、シラキュースですか。

中根　そうそう。そうやって始めていったの。

關本　ボウルス先生は英語で講義なさったのですか。

中根　その頃私は外國にいたので、よく知らない。

關本　私は、まだ學生ではありませんでしたが。

伊藤　英語でした。アメリカ科と文化人類學の兩方の主任を兼ねていました。

中根　ボウルス先生がいらして、それで文化人類學という講義の名前ができたのね。民族學じゃなくてね。

伊藤　戰時中アメリカに歸られて、ハーバードで人類學を終えて再び日本に來られた。

中根　とても親切ないい先生だったですね。

伊藤　そうすると、戰後、先生は日本に來ていたアメリカのCIE關係の人類學者との交流は餘りなかったのですね。

中根　それはインドに行く前と歸國してから少しお會いしたくらいで。たまにお食事したりなんかしたり。だけど私がとくに興味持たなかったのね。

伊藤　それはなぜでしょうね。

中根　だって、アメリカや日本關係のお話が多くて。その頃、あるアメリカの學者が「中根さんはいゝ人だけど、外國人に興味をもたない人だ」なんて云っていることをききました。

伊藤　ちょっとずれているかしら、イシノ・イワオ（Iwao Ishino）とかジョン・ベネット（John W. Bennett）とかペルゼル（John Campbell Pelzel）先生とか。

中根　ペルゼル先生は中國と日本におくわしい。

伊藤　專門が違いますね。ちょっと世代もずれていましょうか。

中根　そうね。ペルゼル先生はちょっと上の方ね。お話する機會は少しあっただけですが、一番印象に殘っています。

シカゴ大學とロンドン大學で教える

伊藤　中根先生はその間にも、シカゴ大學客員教授、ロンドン大學客員教授を務められて。

中根　そう、ローマから歸って一年間はいたのよ、おとなしく。そうしたら、五九年にシカゴ大學から招待があった。そのとき、日本とアメリカの文化の制度の違いをすごく感じました。東洋文化研究所で「シカゴ大學から招待が來ましたから、出張させてください」と言ったの。そうしたら事務が本部に問

い合わせたらしくて、シカゴ大學は私立だからだめだと。とても立派ないい大學ですと言って、何だかんだ言って、そうしたら書類に、「シカゴ大學（私立）」と書いてあって、「國立と認める」なんて書いてあった。そういう時代よ。一九五九年。

關本 五九年はまだそうですか。驚きですね。

中根 想像できないでしょう。

伊藤 シカゴで一年講義なさったんですか。

中根 そう。そうしたら、またロンドン大學のSOAS（School of Oriental and African Studies）の方からインドのことを講義をしてくれと。

横山 先生がシカゴに行かれたころは、シカゴ大學というと。

中根 人類學科は大變活氣があって、すごくよかった。ロンドンもシカゴも人類學の黄金期でね。

横山 もう名だたる人類學者が。

中根 北米インディアン研究の大家で、フィリピンの研究もしたフレッド・エガン（Fred Eggan）とか、その頃國際的な人類學雑誌*Current Anthropology*を創刊し、中米のコミュニティ研究で有名なソル・タックス（Sol Tax）、インド研究のミルトン・シンガー（Milton Singer）など堂々たる人たちに加えて、若手では當時注目されつゝあったエリック・ウォルフ（Eric Wolf）、クリフォード・ギァツ（Cliford Geertz）などもいて。シカゴでは教えるだけでなく、同僚とも大變樂しく過しました。イギリスのファースやリーチとシカゴ大學は、關係がとても密接だったの。だからそこから私のニュースがいったのでしょうね。ソル・タックスやエガンから、ぜひ來るようにって。それでシカゴに行った。シカゴも、インドのときと同じように一年で終わりだと思ったら、今度はロンドンで一年ハイメンドルフ（Christoph von Heimendorf）の招きで、一緒にインドの講義を擔當した。このロンドンの一年の間には、再びファース・セミナーにも出席しましたし、後にロンドンとパリで出版した二冊の英文の原稿をほぼ書きあげていました。こんな調子で、また二年東京にはいなかった。

横山 途中お歸りにならずに、直接行かれて。

中根 そうそう。それはその方が簡單だもの、アメリカからロンドンだから。

關本 先生は、大體默っておられるとどこかから聲がかかって、試驗を受けなくてもちゃんと道が拓けますね。

中根 何だか運よく次々とお誘いがきて、昔のことだから、のんびりしてたのね。

關本 當時の大學の雰圍氣っていうものですか。大學は今では規則ずくめで不自由になるばかりです。

中根 インドへ行くときなんか、全教官が白山上の豆腐屋かど、かで送別會してくださって。

横山 東文研の先生方が。

中根 うん。外へ行くなんていう人は餘りなかったんですね。

横山 東文研の中でも行かれる方が少なかった。

中根 そうよ。そのころは外貨が全然ないわけよ。だから日本から出られないので、向こうから招待があると出られるわけだから、とても少なかったの。それで飛行機もJALなんてないわけよ。ロンドンにいてだれかがJALと言ったら、JALって何？、ときいた程でした。それでインドに行くのはBOACね。そのころはクラスの違いもなくて、全席今のファーストクラスみたいで全體は小さ

かったのね。スチュワーデスというのもいなくて、みんなスチュワードばかりで。

そのBOACのコメットという飛行機が落ちたのね。その次のコメットに私が豫約していたの。落ちたばかりだから今度は大丈夫だろうって乘ったのね。そうしたら無事にカルカッタに着いたんだけれども、その次のコメットがまた落ちて、それでもうコメットやめたのよ。あのとき初めて、寢ていたらイギリス人のスチュワードに英語で起こされて、外國へ來たなと思って。

横山　サンフランシスコ講和條約からもう一年とか、そのぐらいのときに、先生が行かれたのですね。

中根　インドと國交ができたのが五二年だから、五三年の六月ですからね。

フィールドワークに基づく人類學

關本　先生は學生を育てた中でも、フィールドワークをやる學生をたくさん育てたというのが、ご功績の一つだと思いますが、東大の文化人類の當時の先生方の中では、文獻派の先生がいらしたり、必ずしもフィールドワークをやってそれに基づいて經驗的に書いてというふうではなかったですね。

中根　それはそうだわね。

關本　それは別に內部で論爭なんかはなかったですか。

中根　なかったわね。いい方たちだけどアプローチや考え方がずい分違っていて議論はできないと思っていたから。泉先生は泉先生でよく活躍なさるのだけれども、何百キロ踏破なんてタイプで、一つ所にいてフィールドワークするというタイプじゃなかった。外へ出るのはお好きでしたけれどもね。

關本　それで、結局その後の日本の文化人類學も、あるいは社會人類學の行き方というのは、結局先生が開かれた道の方に行っていて、文獻でやる方というのは逆に餘りいな過ぎるかなと、そんな感じもしますけれどもね。これだけ世界じゅうで研究業績がたまっているから、もう少し文獻も改めて見ていいのかなという氣もしますが。

中根　文獻だったら年とってからやったって大丈夫なんだから。

關本　先生がおっしゃる年とったというのは、幾つぐらい。八十を過ぎたらとか、九十を過ぎたら。

横山　教えていただいた方からしますと、フィールドワークをしたいなと思っていると、先生がこういうスカラーシップがあるから受けなさいといろんな方々に、先輩に紹介されているのをよく目にしました。ですから私たちも、先輩があれを受けて受かって今度行かれるから、いつか私たちも、みたいな氣持ちを持ちました。

多分、先生ご自身が、それもご自身のお力なのですけれども、いろいろな形でフィールドワークや留學の機會を得ておられた。ですから學生たちに對しても、そういうところに行く道を拓いてくださったという感じがすごくします。

關本　私は七五年に初めてインドネシアに調査に行きました。それが實は私が外國に出た初めての經驗です。當時は大學院生が外國に調査に行くのに、應募して受かればこれだけのお金がもらえるという資金はまだ餘りなかったのですよね。

中根　そういえばそうね、初めのころは。

關本　先生にいろいろ心配していただいて。

清水　文部省のアジア諸國派遣制度ができてからは、たくさんの人類學者がお世話になりました。

中根　あの制度が始まったのは一九六八

（昭和四十三年）。最初は私審査しなかったんだわ。二、三年たってから審査員となって、ずい分長くやりました。

清水 二年間の奨學金を得られるというのが、あれがとてもありがたかったです。半年ほど大學圖書館で資料を讀んだり、語學の勉強をしたりした後、一年以上のフィールドワークができましたから。

關本 清水さんのころから惠まれ始めたんですよ。

伊藤 菊池（靖）さんが第一號。

伊藤 初年が菊池さんとか原忠彦さんとかでした。

關本 何年ごろですか。

清水 六〇年代の初めのころです。あれで毎年一人か二人人類學者が……。

中根 そうね、受かって。

清水 アジアに行けるようになりました。

中根 そうだ、結城（史隆）君とか清水君とか。

清水 はい、その後には、中川（敏）君や中村（潔）君、鏡味（治也）君、瀬川（昌久）君らが毎年のように續きました。

中根 そうそう。ずい分行ったわね。

清水 あの奨學金のおかげでフィールドワークができたという人がたくさんいました。

伊藤 あれはどういうわけか韓國だけはなかった。しばらくしてから、韓國とネパールを一年交代でやるようになった。韓國はネパール並みだったのですね。

中根 伊藤君は、最初何で調査に行った？

伊藤 自費ですよ、最初は。

關本 私も最初のインドネシア調査は半分以上自費なのです。この邊に、ちょと年下の清水さんたちとギャップがありますので。

清水 僕は文部省のアジア諸國派遣でフィリピンに行かせていただきました。電氣も水道もないような村に續けて一年半住んで、しっかりフィールドワークをしましたので、行く前と行った後では全くの別人だと言われました。

中根 そう、皆さんフィールドワークをなさると、話がとてもよくわかるようになってね。

清水 大學院のときに、英語の民族誌や論文を讀むのは苦痛でしたけど、フィールドワークを終えて戻ってきたら、他の人が英語で書いたものも面白く讀めるようになったし、ちゃんと理解できるようになりました。

伊藤 先生の教育の基本は、いかにインテンシブな厚みのあるフィールドワークをやるか、その一語に盡きると思うな。

中根 だってそれがないと、社會人類學者としては成り立たないよね。

伊藤 それから、こういうようにおっしゃったのを覺えていますよ。いかに多くの資料の中から研究成果を出すか。研究成果以外で、いかに多くの背景に經驗を持っているか、知識というか、得た資料を持っているか。そういうふうにおっしゃいました。

關本 私が一番覺えていますのは、フィールドワークといっても當時まだ情報が乏しいですよね。それで、一度出かけたらそう簡單には歸ってこれない。今なら幾らでも往復できますけれどもね。肩を張って探檢か冒險に行くような氣分がちょっとあって。先生がおっしゃったのは、「おいしいものを食べてよく寢てれば、病氣なんかしないから平氣よ」と。あれは本當ですね。もちろんおいしいものと言っても現地にある限りですが、良く食べて寢て先を焦らないというフィールド調査ができました。

横山 私がフィールドワークについて先生からうかがって覺えていることは、最初はともかくその土地に行って、周りの方とだんだ

ん親しんで、調査はあまり進まなくても別に大丈夫だから、そこにいなさい、ということです。本當に歸國寸前の一カ月とか二カ月とか、一年以上いてからようやく調査ができるようになるから、ともかくそれまでいなさいと。言葉を覺えていなさいというようなことをおっしゃって。

特に中國の場合は、いろいろな意味でなかなか入りにくい部分もあったので、これができない、あれができないと思うこともあったのですけれども、いろいろなことを少しずつやっていけば、關係ができれば、というような氣持ちでいるようにしました。先生のことばで勵まされたというか。

伊藤　僕の場合は、フィールドとの關係を大事にしなさいと何度も言われました。それを守っています。ですから七二年に始めてから今まで三十七年間、いまだに僕はフィールドとのおつき合いがずっとあって、毎年一回、二回行っています。

中根　すごいわね。

伊藤　韓國だからそれができるんでしょうね。

清水　僕の世代の少し前くらいから、文部省のアジア諸國派遣の奬學金で毎年一人か二人の院生がフィールドワークに行けるようになって、本當に惠まれていると思います。僕は、六九年に東大の入試がなかった翌年の七〇年に入學しましたので、僕の上の世代の先輩たちとは少しギャップがあるのですけれども、人類學の教室は學生運動をやった人が多かったですよね。六〇年代の終わりから七〇年代初めの頃かな。そのとき先生はいかがでしたか。授業を教えていたりしたときに、人類學は何のためにやるのか、とかいうふうな質問をされたりということはなかったですか。

中根　彼らは何か變なことをずい分言っていたけどね（笑）。大體相手にしなくて、私はちょっと性格的にノンポリだったかもしれないわね。

伊藤　眞っ最中に、神田のバーがありますね、教室の何かが終わってからみんなで行ったのですよ。僕がまだ學部の學生だったですね。くっついていったら、泉先生、吉田（禎吾）先生もどういうわけか……。中根先生もいらした。曾野先生もいた。そこに學生が、「先生、何のために人類學をやっているんですか」と、談判みたいにやってきて、物すごい緊張の雰圍氣で、中根先生は何もおっしゃらなかったです。そうしたら泉先生がしばらくしてから、「飯を食うためだ」（笑）。あれはよく覺えています。

中根　ひどいときがあったわね。文化人類學の教室で、私は一人でみんなを相手にしていたの。そうしたら泉先生なんか、「僕、電話番していますから、お願いします」って。アフリカにいたイギリスの人類學者たちが、どんなひどいことがあっても女に手を出すようなのは最低だと言っていた。普通はそんなことしないと。それ聞いていたから、私だったらきっとぶたれたりなんかしないだろうと思って、泉先生は電話番でほかの部屋にいて、私がもっぱら對應していた。みんな何だかんだと言うのね。だから私、最後に「あなたたち四十ぐらいになったときにどんな人になっているかしら、よく考えたらどう」ってたんか切って出ていったのよ。そうしたらオーバー忘れていっちゃってね。寒いからまたオーバーとりに行って、スタイル惡かったね、あのときは。でも、あの當時餘り變なことを言った人たちって、今でも何かしっくりといかないわね。

費孝通先生

關本 最初の方で北京の話を伺っていたのですけれども、費孝通先生との出會いは何時だったでしょうか。

中根 費孝通先生はね、七五年に日本から初めて政府の學術文化使節團の一人として行ったときですよ。吉川先生を團長にして。

横山 吉川幸次郎先生。

中根 そう。七五年の三月に。學術文化訪中使節團で、たしか總勢十二人。

關本 日中國交回復の直後ですかね。

中根 そうですね。日本から初めて政府がこういう使節團を出したんですよ。茅誠司先生、林健太郎先生、心臓外科の榊原先生、文學では石川淳氏、中村光夫氏など、偉い人たちばかりでね。曾野綾子さんが一番若くて、その次は私で、いつも車の列ではビリばかりだったのだけれども。

そのころまだ中國も外に開いたばかりだから、一行の行く先々の道では全部信號をとめてしまってバーッとどこでも行った。北京大學學長の周培源先生が大體ご一緒で、政府の案内で訪問。それで北京から西安、上海、桂林など方々回ったんだけれども、費孝通が中央民族學院にいらっしゃるというのを知っていたから、私、その費孝通に會いたいと思っていたの。でも費孝通なんて言ったらきっと困ると思って。まだ文革中なのよね。

だからうっかりしたことできないから、方々見せていただいたんだけれども、もう一つだけ中央民族學院を訪問したいと言ったのね。全部訪問のスケジュールが終わって、みんな歸るというわけ。私だけ殘って行かせていただけませんでしょうか、と。そうしたらOKが出て。

民族學院に着いて、まずずっと一人ずつ紹介していって、費孝通と紹介されて、ああ、この方だと思って。それにしても相當太った紳士で、費孝通の著書*Peasant Life in China*にのっていた寫眞のずい分スマートな姿と違うんで驚きました。そのあとで初めて少しお話ししたのね。

次の日に、私は費孝通ともっとお話ししたいと思って、北京飯店に泊まっていたから、係りの人に「北京飯店でお夕食に費孝通をお招きしたいんですが、いいですか」ときくと、「いいですよ」と言うのね。それで費孝通に車を出してくれて、費孝通がお夕食の時間に私の部屋へいらした。それから食堂に行ってお食事をして、そしてまた私の部屋に歸ったそのとき初めていろいろお話ししたのね。しばらくして車のお迎えが來ていますという電話がかかり、もう歸らなきゃいけないというんで、そうしてお歸りになった。

横山 最初にお會いになった日に、先生が*Japanese Society*の本を差し上げて。

中根 そう。

横山 たしか、北京飯店で。その次にお會いになったときにもう讀んでいらしてというお話でしたよね。

中根 そうそう。

關本 お二人ともファースの弟子だということは頭に。

中根 ファース先生から聞いていたの。それでファース先生は、費孝通をコンセントレーションキャンプかな、どこかへ入れてしまったからって、とても中國に對して批判的だったのね。お氣の毒だけど文通もできないし、情報がないからって心配してらしたの。その意味でも、私、ぜひ費孝通に會ってと思っていた。そのファース・セミナーには東洋から私が二人目なのよ。だから親しみを持っていて、ぜひ費孝通に會いたいと言った。

横山 最初に中央民族學院でお會いになっ

たときと、北京飯店にいらしたときと、だんだんだん少しずつ長くお會いになっている間に、印象は何か變わっていきましたか。最初の中央民族學院では、餘り費先生はお話にならなかったのでしょうか。

中根　みんなで庭を散歩するときにちょっとお話ししたぐらいで。

横山　北京飯店にいらしたときは、どんなふうでしたか。研究のお話もされて。

中根　そうですね。そうしたら*Japanese Society*を讀まれていたので、費孝通が中國の社會について、僕もこういう本を書きたかったんだとかっておっしゃって。はじめてお會いしたわけですが、もう前から友人であったような氣持でお話ができました。しかし、まだそのころ費孝通は自由じゃなかったのよね。許可がないとご自分で自由に出られないような。

伊藤　費孝通さんに關する消息が知れずに途絶えて、皆さんが心配していたときに、中根先生が初めてお會いしたんでしょう。

中根　そうですね。文革中だからね。私と一緒に使節團で行った一人の方が、足がどうとかでお醫者さんに診てもらいたいと言ったの。私も手首がどういうわけか痛くて、東大で診てもらったら何でもないと言われて。その時のお醫者さんは隣の部屋で「つまらんクランケが來てね」と言ってて。だから日本では治らないのね。それで北京で私もついでにお願いして中國の漢方で見てもらおうと思って。そしてお醫者さんが來たの。そうしたら『毛澤東語錄』をぱーっと讀んで、それから診察を始めたの（笑）。そういう時代だったの。學術論文でも全部最初の一ページは『毛澤東語錄』か何かで、それから本當の研究の文章が始まる、そういう時代だったのね。

伊藤　中根先生が費孝通さんの現狀といいますか、消息をヨーロッパの方々に流されたんですか。

中根　ファース先生とかリーチ先生とか費孝通をご存知の方には知らせたけどね。

横山　それから少し時間がたって狀態が少しよくなって、費先生と二度目にお會いになったのは、中根先生が日本にお招きになったときですか。

中根　その前にも二、三回私が北京に行っています。それで行くたびに費先生は少しずつ自由になって、二度目に行ったときは、飛行場に私を迎えにいらしていた。その頃は、私を迎えに來る時間的な餘裕があったんだわ。それから後は大變お忙しくなってきたけれども。社會學會というのをおつくりになったりね。

關本　先生は、女學校時代に北京から東京に引き揚げられて。

中根　引き揚げじゃなくて、子供だけ來たの。

關本　ああ、そうですね。その後七五年まで、ずっと中國とは離れていたのですか。

中根　そうよ、全然行けないもの。特別な人を除いてだれも行けなかったんじゃない。

關本　どうでした、その久し振りの北京は。

中根　とても懐かしかったわね。共產主義だからすごい國になったと思ったけど、中國人のしぐさとかやり方が餘り變わってないのよね。それから日本人の對應も餘り變わってなかったわね。大使館の人たちやマスコミ、ビジネスマンなど、昔の日本人が中國人に對するような何か冷たいものがあって。こういうのは變わらないんだなと思ってね。日本ではすごい親中派がいっぱいいたんだけどね。

チベット

關本　チベットに最初に足を踏み入れられ

たのはいつになりますか。

中根　一九八一年ね。文革が濟んで少しずつ中國が開けるようになって、それでも費孝通が向こうのトップに話してくれないと許可が出なかった。だから私がチベット地帶に行ったのはずい分早かったのね。それからだんだん緩くなって、普通の人も行けるようになったけれども、初めのうちはやはり難しかったのね。特にチベット地區なんていうのは。

關本　どうでしょう、長い間文獻でチベットを讀まれていて、何十年の後に實際に現地に行かれた感想は。

中根　憧れの土地に實際身をおくという感動はありましたが、一九六五年以來インドの亡命チベット人たちを調査していたから、チベットの樣子は相當わかっていたし、その人たちの親類やお友達に會ったり、文獻に出てくる土地を訪ねたり、魚が水をえたような氣がしました。このはじめてのチベットの訪問から九十年代にかけて數回チベットに行きましたが、その間もインドのチベット人たちの調査はずっと續けていたわけです。

關本　先生がチベットへ行っていらしたお話で、お風呂に入らないんだっていうお話を覺えていますが。

中根　あれ、毛穴がみんな開くから寒いんでしょう。

關本　それで寫眞を見せていただいて、青空の色がとても日本や熱帶では考えられないような濃い青で。先生はそういえば、寫眞は昔からプロはだしですね。

中根　そうでもないけど。

關本　ずい分お好きだったんじゃないですか。

中根　寫眞が好きというよりも、行ったところで撮るというぐらいよ。

關本　それにしては、大學院のころ、寫眞を見せていただいて、隨分と感心した覺えがありますけれども。

中根　大學の前の須藤という寫眞屋がプロに近いのがあるとかって言っていた。

横山　繪もお好きだから、そういう映像、畫像を切り取るようなことも感覺的にすぐれていらっしゃるんですね。

日本社會研究・タテ社會

清水　戻ってよろしいでしょうか。先生のご本の話で、先生のお仕事で一番有名なのは『タテ社會の人間關係』が百萬部以上賣れているんでしょうか。

中根　まだ毎年出ています。もう四十年……。

清水　あといろんな國で翻譯されて、それで事前に確認しましたら、出版されたのが、一九六七年（昭和四十二年）で、その三年後に今度は *Japanese Society* というタイトルとしてロンドンのウィーデレフィルド・ニコルソン出版社から出て、さらにまた後にペンギンから出ました。この英語版は、日本のことを知ろうという外國の人にとっては最良の手引書で、今でも讀まれていると思うんですけれども。

一番最初にこの『タテ社會の人間關係』を出版するようになったいきさつは、どういう……日本人の讀者を想定されたのですか。

中根　ロンドン大學から歸ってきたのが六一年ごろじゃなかった？

關本　六一年八月までロンドンとありますね、ここに。

中根　そうしたら、中央公論社の雜誌『中央公論』の擔當者が來て、何でもいいから書いてくれって言うの。何でもいいっていうのよ。歸ってきたばかりだったから、ちょっと新鮮で、日本がエキゾティックに見えたのね。だから、それならちょっと書いてみよう

かなと思って。その前に農村の本を出していましたし。

清水　確か、長野縣や愛知縣、熊本縣でフィールドワークをされて、『日本の田舍の親族と經濟組織』という英語の本を出版されていますよね。

中根　農村の本（*Kinship and Economic Organization in Rural Japan*, Mnonographs of Social Anthropology No. 32, The Athlone Press, London 1967）をロンドン大學のシリーズの一つとして出していた。だからそれと普通の都會の企業とか、それから紛爭中の醫學部の様子とか、いろいろ聞いているうちに、みんな同じだなという感じがして。じゃあこれ書いてみようと思って、それで大急ぎで書いたの。そうしたら京都の猪木先生が、すごいいい批評を朝日新聞に書いてくださって。實は、私だれも讀まないと思って書いたのよ、自分が書きたいことを書くからね。

清水　まず最初は雜誌に。

中根　雜誌『中央公論』、そう。中央公論調みたいなのがあって氣取っていて、私はそういう文章餘り好きじゃないし書けないから、自分勝手に書いた。ただその時考えていたのは、日本語だけど、外國人が讀んでもいいのを書きたいと思ったのね。そうしたら猪木先生がすごくいい書評を書いてくださって。そしてずい分評判になって、いろんな社から、あの論文を本にして出したいからと來て。もう少したくさん書いてくれっていうわけよ。また、少し難しいからわかりやすくしてくれって。そんな暇とてもないし忙しいから、そんなことできないと言ったの。そうしたら講談社だけが、このままでいいですと言うの。

それでも、本になるともう少し手を入れたいと思って、少し直したり加筆したのね。そうしたら、講談社が「加筆や直したところをなしにしてください」と言うのね（笑）。だから私、「じゃあ出さないで結構です」と言ったの。特に出すことに興味なかったから。そうしたらまたしばらくして、「先生のおっしゃるとおりにやります」と言うのね。それで講談社で出すことになった。

それから外國人からは、翻譯させてくれって來たの。でも、英語から日本語はいいのよね。日本語から英語ってよくないわけ。それをよく知っていたから、それは困りますと。ずい分方々から來たから、じゃあしようがない、私書きましょうと、それで書いたのね。ちょうどそのころハワイのイースト・ウエストセンターから招待が來て、ちょうどいいなと。英語で書くときは外國にいた方が書きいいのよね、日本にいるより。それで英語のドラフトを書いたのよ。ハワイに半年いて、それからシカゴに行ったら、フレッド・エガンが讀んで、君、女性だからこれ書けたんだって言うの。男性だとその中にどっぷりいるから書けないだろうというわけよ。

それからロンドンに行ったら、リーチはおもしろいと言ってくれて。四十七士の團結のことを書いたくだりについて、ファース先生は、彼らはホモじゃなかったかと言う（笑）。だから外人から見るとずい分想像が違うのね。そういう誤解がないように書き直したりいろいろしたの。だから、そのドラフトをみんなに見せて。

清水　本になる前に、そのドラフトを皆さんに見ていただいて。

中根　そう。それ以前一九六六年九月にフランスのエビアンで第六回世界社會學者大會があり、そこで私が後に「タテ社會」となる理論の一部を小論として發表したところ、そのセッションの責任者だったイギリスの社會學者ゲルナー（Arnest Gellner）がこれを本

にしたらどうかと云われて。勇氣づけられて、英語でも本にするという考えをもったわけ。

清水 一番最初に日本語で何でもいいから書いてくださいと言われたときに、日本社會のことを書こうと思うと、いろんな人が日本論を書いていますよね。どなたかの研究とか、そういうのを意識されたことはありますか。

中根 全然。だって日本専門じゃないもん。

清水 勉強して、いろんな日本論を見ないで。

中根 全然見なかった。

伊藤 しかし、その前に *Kinship and Economic Organization* はロンドンで刊行ですが、これも時期は一緒ですね。ちょうど並行して。

中根 あっちの方が出るのが遅かったけれど、あれはずっと前ロンドン滞在中に書いたんです。日本では東北型とか關西型とか違うという説があったでしょう。だけど、私は農村は全部基本的に一本同じものが通っているという、その信念があったから。そうしたら、農村がそうなら都會の企業とかいろんなオーガニゼーションにも同じものがあるに違いないと思って。農村社會の研究のある種の延長でもあるわけ。

横山 そのときは、例えばインドの社會とかイギリスとか歐米の社會というものが片側にあって、それから見ると、日本というものの特色がくっきり見えた。

中根 とくにインドとイギリスだわね。

清水 中國、インドを知っていて、そことヨーロッパを知っているからああいうオリジナルなアイディアが出るのでしょうね。

伊藤 構造という次元で書かれたのでしょうね。

清水 『タテ社會の人間關係』は日本の一般の方もよく讀まれたと思うんですけれども、先生が退官のときに書かれた『社會人類學』という東大出版會から出た本は、とてもわかりやすいアジア諸社會の比較分析で、僕は大學の教養の授業のときに、アジア社會論というテーマがあると、テキストで使っているんですけれども。

中根 感謝しています（笑）。

清水 二十年前に『タテ社會』で言われたことが、『社會人類學』では、インドや中國と比べた廣いパースペクティブのなかで、とてもクリアに説明しなおされています。父系制の社會と双系の社會の違い、日本社會の特徴などが、ひとつの視點というか説明原理で説き明かされていて、社會人類學の一番の強みとおもしろみがよく出ていると思います。

アジアの社會

關本 先生にとって、まず、お若いころのチベットがある。アジアという枠組は餘りお考えにならなかったですか。アジアという議論も戰後盛んでしたよね。

中根 そうそうそう。

關本 竹内好なんかが非常にスターでしたよね。

中根 「アジア」は、ヨーロッパやアフリカなどに對して設定しうる枠組みとしてありうるし、近年よく使われてきたけど、私にとっては、中國・インド・アラブなどを中心とした三つの異なる世界はそれぞれがヨーロッパに匹敵する存在だと認識しているし、また日本はずい分違っているから、アジアと一括りにして論じたりアジア人などという呼稱には抵抗を感じるの。

清水 ついつい歐米との關係だけで、アジアのことを考えてしまうことが多いんですけ

れども。

僕はいつだったか先生と飲んでいて、インドや中國の上流のインテリの人たちの教養といい人間的な大きさといい、日本はなかなかなわない、というようなことをお聞きして、すごく印象に殘っています。

あと、中國やインドや、そしてヨーロッパでも、學者はお酒を飲んでもなかなか醉わないで、いつまでも學問の議論をする。日本の大學の先生は、お酒を飲むとやがて別の話題になっていったりすることが多々あって、知的にタフさが足りないというようなことをお聞きしました。そのときは、そうか、注意しなきゃと思ったんですけれども、やはり僕も酒飲むと、どんどん學問じゃない話題をするようになってしまいます。

伊藤　中國がああいう社會主義體制で閉ざされてなければ、先生は中國を研究なさったかな。

中根　どうだろう。でも中央アジアに興味持っていたからね。それでチベットになっちゃったから。

韓國

伊藤　韓國はいかがでした。

中根　韓國って私、大陸の國だと思ったわね。日本と似ているところはずい分あるけれども、やはり違うって見るべきだと思うわね。この間もあるセミナーで美術の方が言っていたのね。例えば日本では尾形光琳とか琳派って派があるでしょう。そして大體テクニックは、弟子たちは先生のタイプを踏襲しなきゃいけないんだってね。それでなきゃ一流になれないって。ところが韓國は、違って、個人個人がそういう系統というのをつくらないと言っていらしたけど、タテ社會と違うわね。個人が強いじゃない。

伊藤　永續的な組織もなければね、様式とか技法とか、そういうのが餘り意味ないんですね。

中根　そうなのね。

伊藤　もっと別のもので系譜を。

中根　だから全然違うと思って。それから冬の寒さね。ソウルは北京と同じなのよ。冷たいって感じでしょう。日本は寒いって感じ。

伊藤　私を助手にとってくださって、その時期から先生とご一緒して韓國に參りましたけれどもね。

中根　韓國は男女の差がすごくて。伊藤君と私の寢る建物は違うのね。伊藤君は男の方で、私は女の方に寢るわけ。

伊藤　全然別なんです。

中根　夜、遠くから伊藤君の呼ぶ聲がするの。「中根先生」って。何事かと聞いたら、藥持っていませんかって。どなたかおなか壞して。だから、女のセクターに近寄れないのよ。

伊藤　上流社會は男女別で、家がそういう構造になっているわけです。完全に分かれてしまっている。だけど中根先生は女性として、あの四百年の歴史のある李退溪の宗家の男性コーナーに初めて上がられた。そう言っていましたよ、李退溪の十四世孫が。

中根　あの家はすごかった。だから日本の植民地時代、全然荒らされてないのね。日本人も遠慮しちゃっているのよ。私たちが歸るときなんか、たばこを一箱ずつくれたじゃない。昔式でね。

伊藤　文人墨客なんですね。

中根　ああいうのって日本にないもんね。

伊藤　中根先生はそのとき、あそこの雨でサーッと煙っている山を、その男性のコーナーのベランダからごらんになりながら、「やっぱりこれじゃ韓國はだめね。こんな景色で

ぼーっとたたずんでたら、この社會は取り殘される」って（笑）。

中根　そんなこと言ったかしら。

伊藤　上流の文人階級の傳統の社會の。

關本　何年ごろの話ですか。

伊藤　地震があった年かその次の年かな、七三年か四年です。

關本　漢江の奇跡のずっと前ですね。

伊藤　もう經濟發展途上ですね、七〇年代初めですから。

關本　まだ繁榮は目に見えてないころでしょう。

伊藤　ソウル大學の李杜鉉先生や金宅圭先生の案内で、まだ電氣がない農村に行きまして、李退溪宗孫が住んでいる舊家を訪ねて行った。

中國

清水　僕が東文研の助手で、先生が所長をやっていらした一九八〇年代の初めのころに、超多忙でいらしたんですけれども、中國語の個人教授について勉强されていたんじゃなかったでしょうか。

中根　そのころ、中國語を？

清水　中國に行けるようになったので、娘時代の中國語を思い出すために。

中根　ちょっとついたかしら。大して勉强しなかったけど。

清水　やられたんじゃないのかな。中國語で中國の人としゃべってられましたから。

中根　だれか來ていて、北京の人が。

清水　そのために中國語を勉强されているのだと聞いて、ああ、偉いなと思って。

横山　一九八一年に私が教養學部の人類學の助手になったんですね。ちょうどそのころから、多分先生と中國との關係がより密になられたような氣がします。

中根　そうね。

横山　費孝通先生もいらっしゃいましたし、その後、胡起望先生とか索文清先生が東大に全部で一年。

中根　そうね、私、費先生のご依頼で二人を引き受けたの。

横山　私は助手になりたてで中國語を少しやっていたのですけれども、餘りまだ上手じゃなくて。ただ先生がお引き受けになった先生方をいろいろご案内して、一緒に行かせていただいて、隨分實地の中國語の訓練にはなったんですね。

中根　横山さんがすごく中國語うまくなっちゃったのね。

横山　先生のおかげなんです。やっていたんですけれども、やはり國内で實際に使う機會はなかったんですね。先生方がいらっしゃって、ちょうどそのときに堀一郎先生のお宅に下宿を。

中根　そうそう。

横山　そうですよね。中國からいらしたお二人の先生が。だから堀先生とのご關係は、先ほどうかがった津田塾のときにあって、そしてまた。成城のお宅にお迎えに行ったりとか何かいろいろしているうちに、中國語も少しは鍛えられて。

伊藤　堀先生のお宅には、いろんな人が訪ねて、僕もお宅で授業を受けたことがあります。

中根　紛爭中ね。

伊藤　紛爭中。

中根　いい先生だった。

關本　東大の文化人類學研究室に中國からの留學生がふえたのも八〇年代半ばぐらいからですか。

横山　私は八六年に中國の雲南から歸ってきたんですけれども、そうしたらもう既にたくさんいらして。秦さんとか聶さん。あと韓

敏さんとか。

關本　最近中國から餘り來ないんですよね。

中根　そう言えばそうね。私は知らないけど。ビジネスの方はたくさん來るらしいけど、研究の方はね。

關本　日本にはたくさん來ているでしょうけれども、留學生もたくさん來ているでしょうけれども。東大で見る限り、相變わらず國籍別で言えば中國大陸からの留學生が一位で、いろんなところにいますが、昔ほどは多くない。もう少し出身國が多樣化しているという感じで。

横山　人類學が少なくなったんですか。

關本　人類學は少ないですね。

横山　中國から來る留學生、何で少なくなったんでしょうね。

關本　多分、一つは東大へ入りにくいからだと思うんですけれども。もう一つは、博士論文を割とちゃんとしたのを書かなきゃいけないらしくて、簡單にはもらえない。

中根　アメリカの方がやさしいって。

關本　日本でもほかの大學の方がやさしい。私がたまたま指導していた學生が、今、中國の大學の人類學の先生になっていて、緣が深いんですけれども。人類學の分野でも中國とのかかわりとか、あるいは中國の學生が東大に來て勉強して學位とって歸るとか、そういうことは續けていきたいなと思っているんです。そのためにはこういうことが大事という點はありましょうか。

中根　人と人との關係というものが何よりも大切だけど、アメリカなんかは、中國人とのそういう師弟關係にすごく積極的よね。あらゆる分野でね。だけど日本の場合は、特定の關係はとても強い、深いものを持っているんだけれども、そんなにたくさんはないんじゃない。

關本　たくさんはないっていうと。

中根　そういう師弟關係みたいなのが長期にわたって。例えばＭＩＴとインドのＩＩＴが強い關係があるとかね。

關本　東大は清華との關係が一番深いですね。

中根　そうしたら、理工系なんでしょう。

關本　理工系中心になりますね。文系もありますけれどもね。

横山　中國の場合は、ほかの國以上に人と人との個人的な關係が重要な氣がするんです。例えば費孝通先生と中根先生のような、研究者としてもお互いを認め合って親しい關係、そういうものがあると、それを中心にほかの人の交流も生まれる。ちょうど聶さんが來られたみたいに。そういうのがなくて大學と大學との關係というと、なかなかそれは難しい。中國の場合は、個人レベルがかなり意味を持ってくるような氣がしますけれども。

伊藤　韓國も同じです。

中根　そうね。

關本　大學と大學はしょせんだめなんですよ。大學と大學というのは個人が支えているんです。大學同士の關係がまずあって交流が進むはずはないんです。

費孝通先生以外に、何か特に思い出に殘っている中國の方というとどなたでしょう。

中根　鄧銳齡（Deng Ruiling）という歷史學者で人類學にも關心のある方で、中國藏學研究中心に屬していらっしゃり、とくに明、清時代のチベット關係の研究では第一人者です。

關本　チベットの研究をなさっている。

中根　お父樣が理藩院にいらしたし、滿州八旗の上位のご出身のためか、これもまたさっき言ったインドの上流の傳統的な方に對比できるような筋のいい方で、教養もすごくあ

って。もう中國人にああいう人は最後だろうと思うけれども、そういう方がいらして、その方とは今でもチベット研究について緊密な關係はずっと續いていますけれどもね。でも費孝通のように政界と學界に廣い人脈を持っているという人とは違う。費孝通というのはまた特別でね。

伊藤 鄧さんですか。

中根 そう。鄧銳齡という、本當の學者ね。中國でなきゃいないような學者。

清水 北京に一年いたときに先生に紹介していただいて、お手紙書いたら鄧銳齡先生がご自宅にお招きくださって、四合院にお住まいでした。本當に貴族というか、女性的なやわらかいコミュニケーションで。

中根 清朝のスタイルでね。

清水 しゃべり方も品がいいし。

中根 ものすごくきれいな北京語よね。

清水 四合院のお宅にびっくりして、態度、物腰、しゃべり方の柔らかさ、優雅さにびっくりしました。

中根 あんなすごい革命を經ても、そういうのが變わらない。

伊藤 先生は林耀華先生とは。

中根 お會いしました。でもそんなにつき合いないけど、私の研究室にもいらしたことがある。

横山 あります、八〇年代初めですね。

伊藤 推薦狀を、お手紙をいただいて。

中根 あの世代というのは、みんな外國にも行っていらっしゃるし、國際的で。

伊藤 先生は臺灣の研究者とはいかがですか。

中根 前は香港中文大學にいた喬健とか李喻園。それから香港のアンブロス・キン（金耀基）。

伊藤 費孝通先生の八十八歳の誕生日のときに、喬健さんとかみんな一緒でした。

清水 八〇年代初め、先生が「社會科學とアジア」と題する國際會議を主催されたとき、インドからシュリニバス（M. N. Srinivas）先生、インドネシアからクンチャラニングラット（Koentjaraningrat）先生、タイからパティア・サイホ（Patya Saiho）先生らがいらして、アジアのインテリの代表選手のような方々が集まられました。

中根 まだ清水君若かったけれど、事務局長をお願いして。

清水 事務局をやったんですけれども、本でしか知らないビッグネームの方々が皆さんやさしくて、物腰がとてもやわらかいんですね。それに驚いて。山本達郎先生もとてもやわらかい感じで、あのころのアジアのインテリの似たような雰圍氣というのかな、それを感じて。

中根 樂しんだ？

清水 驅け出しの若造ですから、偉い先生に面と向かうと、つい緊張してしまいそうなんですけれども、全然緊張させないやわらかいコミュニケーションで應對してくださって。人間の風格の大きさみたいな、知性の深さみたいものを感じさせていただいて勉强になりました。若いときですが、强烈な印象を受けました。

伊藤 費孝通さんとのことでは、大分後でしょうね、先生と費孝通さんとお孃さんを車に乘せて、僕が運轉して山梨まで行きましたよ。山梨の農村、農村を見たいとおっしゃって。茅葺きの農家でいろりに火をくべて、煙いところで、昔のヤオ族かミャオ族の調査を思い出すとおっしゃっていましたね。

中根 そうでしたね。來日された際、費孝通先生が、急に日本の田舍をみたいとおっしゃって。

横山 九〇年代に入ってからですかね。

民族學の推進者たち

關本　大分時間も經過してきたかと思いますけれども、何か皆様最後にこれを伺っておきたいということはございませんか。

横山　小さなことなのですけれども、先生が最初にお話になった岡正雄先生がボスでいらした昔の民族學協會の集まりっていうのは、どんな形で行われたのですか。月に一回の研究會のようなものだったのか、それとも毎年の學會のようなものだったのか。

日本が外貨を保有しなかった時代に、インドの奬學金を得て初めて渡航が可能となった。また、當時日本民族學協會の會長で國際電信電話會社の社長であった澁澤敬三氏が、調査費の一部をご援助下さった。Guha 氏は岡正雄教授がご紹介下さったのであった。
（左から、岡正雄、澁澤敬三、Guha、Heine-Geldern の諸氏、1958 年福岡の飛行場にて）

中根　インドに行く前は、私は若すぎて、その内情はよく知らなかった。でも、印象的なのは、みなさん大學に講座がないから、我々がやるんだと大變熱心な民族學推進者だったの。毎年人類學會と合同の大會を開催していた。それが一九六八年の東京、京都で開かれた第八回國際人類學民族學會の原動力になったわけ。こうした一連の協會の活動を可能にしたのは澁澤敬三氏の會長として、また經濟的にもパトロンとしての貢獻が大きかった。この協會については、後に私が理事長のときまとめた『財團法人民族學振興會五十年の歩み－日本民族學集團略史－』（昭和五十九年十一月）を御參考になさって。

伊藤　その民族學協會の外に、例えば九學會の調査などにも先生は參加されましたか。

中根　九學會の調査のときは私はいなかったの。

伊藤　餘りほかの人類學者とのおつき合いというか。

中根　一應は知ってましたけど、餘りなかったの。

伊藤　外國にずっといらっしゃったんですね。

中根　それと關心の對象が違っていたからでしょう。その方たちと比べて、ヒマラヤ、チベットに興味をもっていた京都の今西錦司さん、桑原武夫さん、長尾雅人さん、佐藤長さんなどは、みな私より世代が上の先生方ですが、ずい分親しいおつき合いがありました。私は生來、東京とか京都ということに拘泥しないたちで。

伊藤　馬淵先生は。

中根　馬淵先生はいらしたけど、あの先生はとても話し方に癖のある方で、話していても何とおっしゃったのかよくわからないということが多くて。論文などからもすぐれていられることは知っていたけれども。

伊藤　杉浦健一先生とは、先生はあちこちで。

中根　初めて人類學が生きた人間をやろうと思ったときに接觸した先生で、また御自身が私の母の里である岡崎の方で、東京ではそのころまだ人類學教室に布團を持ち込んで泊ってらしたの。

分析の視點と社會

横山　先ほど清水さんが『アジア諸社會の

考察』を社會人類學のテキストで使っていると。私も使わせていただいたんですけれども、あれを讀んでいるときにふと思ったのは、先生がkinshipあるいは世代がだんだん交代していくときの繼承の仕方を說明されるときに、世帶を中心として息子とか娘が何人殘るかというようなことできれいに整理をされていて、とてもわかりやすいんです。それはイギリスの社會人類學などのkinshipの分析の中に出ないわけではないんですが、household中心で、ちょっと見る角度が違うような感じがあります。私、先生のご紹介で費孝通先生の『生育制度』の翻譯をさせていただきましたが、費孝通先生も各世帶がどのように繼承されていくかということを世代交替という概念で考えています。そういう見方をされるというのは、ある意味で現實の社會とか人間關係とか家族というものをすごくリアルにごらんになろうとすると、そういうものが出てくるような印象を受けたのですけれども、そういうことはないですか。つまりkinshipを親族集團や親族關係という視點から分析するという見方はもちろんあるんですけれども、それだけではなくて、生活というもの、生活共同體ですとか世帶というものを中心に見る見方とkinshipとをうまく融合して、兩面から分析していこうというところ。何かごらんになるときにすごくわかりやすくスパッと切ってくださるのですけれども、それが、例えば人類學をやってない人でも、自分の生活とかそういったものを考えるととっつきやすいような說明をしてくださる。

中根　そうね。householdという概念がイギリス人なんてなかなかないのね。貴族にはあるのよね。ハウス・オブ何々と言うでしょう。だけど一般にはそれがなかなかなくて、初めてロンドンに行ったとき、なかなかわかってくれなくて困ったことがあるんだけど、そういう考え方があるのはkinshipが餘り強くない社會に出てくるわね。kinshipが強いと個人とのネットワークでいけるわけだけど、それが餘り強くないと日本みたいに家というのが枠になるのね。線と個じゃなくて。

伊藤　關係よりも組織ですね。

清水　イギリスの社會人類學は、基本的には家族と親族（family and kinship）を中心とする社會構造の研究が柱になっていると思いますけれども、先生の社會人類學では、アジア社會の場合には今おっしゃったようにhousehold、世帶が重要になっていますね。それが『タテ社會の人間關係』では、場の論理につながってくると思いますが。

伊藤　家の日本的なアプローチでしょうね。韓國研究でも、日本人は家というものに注目するんですね。組織とか繼承とか、それから連續性とか經營とか。韓國人はそういう見方をしない。

中根　韓國は中國と同じで、ネットワークでね。

伊藤　個と個の關係、リレーションシップで見ていく。

中根　だからタテ社會にならないのよ。

清水　父系原理を持つ韓國や中國、インドと日本は全然違うというのが。

伊藤　組織に關心がない、組織研究にも。

大學外の活動と文化人類學の研究

横山　先生はご研究のかたわら、外務省や文部省關係などのお仕事をたくさんおやりになってこられました。そういう社會的なお仕事に向かわれる時、どういうお氣持ちがあったんでしょうか。

中根　官僚というものに興味があったわね。みんなよく官僚の惡口をいったり、お役人に弱かったりしてるけど、本當はどんなも

のか知りたいと思って。

横山　それで、いかがでしたか？

中根　彼らはタテ社會の最たるものであることは知っていましたけど、はじめて文部省の審議會委員の依頼を受けて（一九六七年、『タテ社會の人間關係』の初版が出た年）以來、長い間いくつもの政府の委員など引受けることになりましたが。實際は彼らと接觸していろいろなことがわかりました。その中で二～三あげてみると、まず省によって大變特色が異なっていること。次に、上位の局長などよりも、課長、課長補佐、係長あたりが大變重要な働きをしていること。そして、全體的に優秀で有能な人たちが多く、同じようにみえ、同じように仕事をしていても、個人差が大きいということかしら。例えば、あの人が課長のうちにやっておかないとうまくない、とかね。

横山　また、海外青年協力隊に關連したお仕事もされていますが、その中で何か氣付かれたことがありますか？

中根　海外青年協力隊とはその創設間もない頃から、いろいろ依頼を受けることが多く、現場の視察にもたびたびいきました。「協力隊を育てる會」では茅誠司會長のあと

を繼いで、一九八六年から一九九八年まで會長を務めました。この協力隊は日本の若者にとって大變よい制度と思います。時代により日本や對象國の變化がありますが、何よりも日本の若い人たちの成長には大きなプラスがありますね。丁度文化人類學でフィールドワークをすることと似た效果をもっていて。つまり自分と全く違う環境の中に自身をエクスポーズするということは、日本の若者にとって必要なことなの。何か仕事で關係したときでも、協力隊で行ってきた人というと、きたえられているはずという何か安心な感じがします。

關本　どうでしょう、先生。子供のころに中央アジアに興味を持ってから今日まで、長年の大先輩として、今の日本の人類學あるいは世界の人類學に向けて、何か一言、こんなことを言っておきたいということはございませんか。

中根　例えば、私よく考えるんだけれども、文化人類學をやる人は、文化人類學ということにとらわれ過ぎるところがあるわね。文化人類學というのは、インテンシブなフィールドワークなしでは成り立たないけれども、それと同時に、自分の好きな問題の追究が大切だと思う。文化人類學はこうであるべきだとか、文化人類學だからこうだっていうのではなくて、自分の追求したい問題をどういうふうに見たらベストかという、そういうアプローチの方が大切だと思うわね。

そのことと、文化人類學で同じような關心をもっている仲間だけのせまいところに沈潛しないで、隣接科學をはじめ、他の分野の人たちともつきあって廣い視野をもちながら、自分の研究をすすめていくことが必要ね。そうすることによって、新しい見方、考え方も生まれるでしょうし、他からみても興味をそそられるような研究ができると思うわ。そして、云うまでもなく、訓練という文化人類學のベースをもっていないと出せない特質というか、きびしさをもつものであること。

關本　中根先生、どうもありがとうございました。

中根　私はもともと先生になるなんていうつもりはなかったし、先生には向かないと思っていますから、皆さんにとってよい存在ではなかったと思って。先生としては皆さん不滿があったことでしょう。

横山　中根先生が一番怖かったですよ。大

學院のときも、私はしかられましたし。でも、それが身にはなりました。

中根　だれかが『未開の顔・文明の顔』を讀んで、もっとやさしい先生だと思ったら、怖かったって。

横山　怖いというのは、ある部分で嚴しさを持っていらっしゃって、ずばっとおっしゃるんですね。わかっていらしたときにばっと、あなたはここがだめですよとおっしゃってくださる。餘りそういう個人的に、あなたはここがだめだ、こういう點がだめだというふうには餘り、わかっていてもはっきりおっしゃらない先生の方が多いかもしれない。

伊藤　昔の先生は嚴しくきちんと指導するというか。叱るということも非常に大變なんですけれども、今はそれができなくなっているんですね。うちの父なんかも、それができないのは若いんだ、未熟なんだと。僕が覺えているのは、先生に非常に嚴しく叱られたことがありますよ。ゼミのやり直しを命じられた。

中根　私、それで伊藤君をよく覺えたの。あのころ三人ぐらい發表を途中でやめさせたわね。一回言われてもう二度と出てこなくなったのもいたわね。伊藤君は次に來て、とてもいい發表をしたの。それがとても印象深かった。

伊藤　そのとき、學生に對してあんな嚴しい叱り方はひどいと、ほかの大學院生がみんな控室でプンプン言っていたんです（笑）。ところが僕はけろっとしてたんですね。

中根　次にとてもいい發表をしたのね。そんなに嚴しかったかな。

伊藤　やはり嚴しかったです。

横山　私も、やり直しではなかったんですけれども、「あなた今回だめですね」って言われたんですね。次にやったときに覺えていてくださって、「あ、今度はよかったわ」っておっしゃってくださった。

中根　そんなにひどく言った覺えないんだけどな。

横山　本當に惡いからおっしゃるんだと思います。

中根　私自身嚴しくしようなんて氣持は全然なかった。しかし、知的怠慢には耐えられないたちで、ついそのような出方になったかもしれない。

伊藤　今、そういう嚴しさが缺けちゃっているね。

關本　それでは、この邊で。こんな貴重な樂しいお話をうかがえて、とても今日は幸せでした。中根先生、どうもありがとうございました。

文責者　横山廣子

平成二十年十月二十日

於　東方學會

座談會の記事における一部の文字遣いは、筆者の希望による。

第百十七輯收載座談會「學問の思い出——高崎直道博士を圍んで」内訂正二箇所

・二一七頁下段前より一三行目のICANAS（國際アジア・北アフリカ研究會議）はIUOAS（國際オリエント・アジア研究連合）に訂正。

・二四三頁下段後ろより五行目の平成一四年（二〇〇二）は平成一二年（二〇〇〇）に訂正。

中根千枝教授年譜

大正　十五年十一月　東京府豐多摩郡戸塚町にて出生
昭和　八年　四月　東京府東京市杉並第五尋常小學校入學
昭和　十四年　三月　北京日本小學校卒業
昭和　十四年　四月　北京日本高等女學校入學
昭和　十九年　三月　東京府立第八高等女學校卒業
昭和　十九年　四月　津田塾專門學校外國語科入學
昭和二十二年　三月　同上　卒業
昭和二十二年　四月　東京大學文學部東洋史學科入學
昭和二十五年　三月　同上　卒業
昭和二十五年　四月　同上　大學院入學
昭和二十七年　三月　同上　修了
昭和二十七年　四月　東京大學助手（東洋文化研究所）
昭和二十八年　六月　インド・連合王國・イタリー留學（～昭和三十二年九月）
昭和三十三年　三月　東京大學講師（東洋文化研究所）
昭和三十四年　六月　シカゴ大學客員助教授（～昭和三十五年七月）
昭和三十四年　十月　毎日出版文化賞
昭和三十五年　三月　（財團法人）日本民族學協會理事・評議員（～昭和三十九年一月）
昭和三十五年　九月　ロンドン大學客員講師（～昭和三十六年八月）
昭和三十七年　四月　東京大學大學院生物系研究科人類學課程擔當（～昭和四十年三月）
昭和三十七年　五月　東京大學助教授（東洋文化研究所）
昭和　四十年　四月　東京大學大學院社會學系研究科委員會委員（～昭和四十八年三月）
昭和　四十年　五月　澁澤賞（日本民族學振興會＝もと民族學協會）
昭和四十一年　五月　日本學術會議第八回國際人類學民族學會議組織委員會委員（～昭和四十五年九月）
昭和四十二年　七月　文部省保健體育審議會委員（～昭和四十七年七月）
昭和四十二年　九月　建設省住宅對策審議會委員（～昭和四十四年八月）
昭和四十三年　六月　建設省都市計畫中央審議會委員（～昭和四十九年六月）
昭和四十五年　一月　東京大學改革委員會委員（～昭和四十八年三月）
昭和四十五年　四月　東京大學教授（東洋文化研究所）
昭和四十五年十一月　東京大學大學院社會學系研究科文化人類學課程主任（～昭和四十八年三月）
昭和四十六年　四月　東京大學大學院協議會委員（～昭和四十七年十一月）
昭和四十六年　八月　文部省日本ユネスコ國內委員會委員（～昭和五十二年八月）

昭和四十八年 二月 東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所運營委員會委員（～昭和六十四年一月）
昭和四十八年 九月 米國行動科學高等研究所客員教授（Fellow）（～昭和四十九年六月）
昭和四十八年 九月 國際人類學民族學連合副會長（～昭和五十八年九月）（Vice-President of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）
昭和四十九年 九月 國立民族學博物館運營協議員（～昭和六十三年九月）
昭和 五十年 二月 オーストラリア政府招待
昭和 五十年 三月 日本政府派遣學術文化訪中使節團
昭和 五十年 四月 大阪大學教授併任（人間科學部）（～昭和五十四年三月）
昭和 五十年 五月 英國王立人類學會名譽會員（Honorary Member of Royal Anthropological Institute of Great Britain）
昭和 五十年 九月 コーネル大學特別客員教授（Professor-at-Large）（～昭和五十六年九月）
昭和 五十年十二月 國立民族學博物館教授併任（～昭和五十五年三月）
昭和 五十年十二月 ガンジー・インド首相より、インドに對する貢獻に對し、感謝狀
昭和五十一年 二月 インド政府招待
昭和五十一年 六月 （財團法人）民族學振興會理事・評議員（～昭和六十三年六月）
昭和五十一年 九月 スェーデン・アカデミー招待
昭和五十二年 四月 米國哲學協會會員（Foreign Member of American Philosophical Society）
昭和五十二年 四月 內閣總理大臣官房審議室對外經濟協力審議會委員（～昭和六十年十月）
昭和五十二年 七月 大藏省財政制度審議會委員（～昭和六十二年三月）
昭和五十二年 九月 ドイツ政府招待
昭和五十二年十二月 環境廳中央公害對策審議會委員（～昭和五十九年五月）
昭和五十三年 四月 東京大學大學院社會學系研究科委員會委員（～昭和五十五年三月）
東京大學大學院社會學系研究科文化人類學課程主任（～昭和五十五年三月）
東京大學大學院協議會委員（～昭和五十四年三月）
昭和五十四年 七月 東京大學出版會理事（～昭和六十年七月）
昭和五十五年 四月 東京大學東洋文化研究所長（～昭和五十七年三月）
東京大學評議員（～昭和五十七年三月）
東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター長（～昭和五十七年三月）
昭和五十六年 七月 厚生省人口問題審議會委員（～昭和六十三年七月）

昭和五十七年	四月	文部省科學官（學術國際局）（～昭和六十一年三月・平成元年～六年二月）
昭和五十七年	九月	アジア經濟研究所參與（～昭和六十三年八月）：（平成七年二月～平成十一年二月）
昭和五十八年	四月	東京大學大學院協議會委員（～昭和六十年三月）
昭和　六十年	四月	經濟企畫廳經濟審議會委員（～昭和六十二年三月・平成元年～六年二月）
昭和　六十年	七月	昭和六十年度外務省大臣表彰（經濟技術協力の推進に盡力）
昭和　六十年	八月	國際協力事業團昭和六十年度國際協力功勞者表彰
昭和　六十年	十月	婦人問題關係功勞者內閣總理大臣表彰
昭和六十一年	二月	文部省學術審議會委員（～平成七年七月）
		國際協力事業團運營審議會委員（～昭和六十三年二月）
昭和六十一年	五月	（財團法人）民族學振興會理事長（～平成十一年十月）
		（社團法人）協力隊を育てる會會長（～平成九年五月）
昭和六十二年	三月	停年により東京大學教授退官
昭和六十二年	十月	國際交流基金賞
昭和六十三年	四月	帝京大學文學部國際文化學科教授（～平成三年三月）
昭和六十三年	八月	國際人類學民族學會ゴールド・メダル
平成　元年	八月	文部省日本ユネスコ國內委員會副會長（～平成七年八月）
平成	二年　四月	紫綬褒章
平成	二年　五月	中國中央民族學院名譽教授
平成	二年十一月	法務省入國管理政策懇談會（伊藤正巳座長）（～一平成七年十一月）
平成	三年　八月	（社團法人）農村環境整備センター理事長（～平成九年十月名譽會長）
平成	三年　九月	福岡アジア文化學術賞
		文化功勞者選考審議會委員
平成	三年　十月	ユネスコ文化と開發委員會（～平成八年九月）
平成	五年　一月	御進講
平成	五年十一月	文化功勞者顯彰
平成	六年　七月	中國山西大學名譽教授
平成	六年　九月	對外經濟協力審議會會長（～平成十三年一月）
平成	七年　三月	國際協力事業團運營審議會委員（～平成十五年九月）
平成	七年　八月	文部省日本ユネスコ國內委員會會長（～平成八年八月）
平成	七年　十月	科學技術會議議員（～平成九年七月）
平成	七年十二月	日本學士院會員に選定される
平成	十年　四月	勳二等寶冠章
平成	十三年十一月	文化勳章
平成	十八年　五月	日本學士院第一部部長（～平成二十一年五月）

中根千枝教授主要著作目錄

著書

『未開の顔・文明の顔』 中央公論社 一九五九 角川書店（文庫）一九七二

Kinship and Economic Organization in Rural Japan, Monographs on Social Anthropology No. 32, London School of Economics, The Athlone Press, London, 1967

Garo and Khasi: A Comparative Study in Matrilineal Systems Mouton & Co., Paris, The Hague, 1967

『タテ社會の人間關係――單一社會の理論』 現代新書一〇五 講談社 一九六七

『家族の構造――社會人類學的分析』 東洋文化研究所 一九七〇

Japanese Society Weidenfeld & Nicolson, London; California Univ. Press, Berkeley; 1970; Penguin Books, 1973; Tattle Classics Tokyo, 2009.

『適應の條件――日本的連續の思考』 現代新書三〇〇 講談社 一九七二

『家族を中心とした人間關係』 學術文庫 講談社 一九七七

『タテ社會の力學』 現代新書五〇〇 講談社 一九七八 講談社學術文庫 二〇〇九

『日本人の可能性と限界』 青年海外協力隊シリーズ 講談社 一九七八

『社會人類學――アジア諸社會の考察』 東京大學出版會 一九八七 講談社學術文庫 二〇〇二

（共著）『インド村落の社會經濟構造』（福武直・大內力・中根千枝）アジア經濟研究所調査研究報告叢書第五一集 一九六四

（上記英譯本）*The Socio-Economic Structure of the Indian Village-Surveys of Villages in Gujarat and West Bengal*, Institute of Asian Economic Affairs, 1964

編著

『人間の社會』〔Ⅰ、Ⅱ〕現代文化人類學三・四（泉靖一と共編）中山書店 一九六〇

The Symposium on Family and Religion in East Asian Countries, Tokyo, 1971, Odawara, 1972, Special Issues: *East Asian Cultural Studies* Vol. 11, Nos. 1-4, Vol. 13, Nos. 1-4. The Center for East Asian Cultural Studies, 1972.

『韓國農村の家族と祭儀』 東京大學出版會 一九七三

LABRANG—A Study in the Field by Li An-che（『*LABRANG*（拉卜楞・拉布郎）李安宅の調査報告』）東洋學文獻センター叢刊 別輯五 東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター 一九八二

『親と子の絆』（河合隼雄・小林登と共編） 創元社 一九八四

Social Sciences and Asia—Proceedings of Asian Symposium on Transcultural Research in the Social Sciences with special reference to Concepts and Methods, April 25-28, 1983. Institute of Oriental Culture Special Series 4 東洋文化研究所叢刊 一九八四

Map of Lhasa drawn by Zasak J. Taring（Ed, Chie Nakane), The

University of Tokyo Press, 1984
『財團法人民族學振興會 五十年の歩み――日本民族學集團略史』財團法人民族學振興會 一九八四
『江戸時代と近代化』(大石愼三郎と共編) 筑摩書房 一九八六
Tokugawa Japan: The Social and Economic Antecedents of Modern Japan, (Ed. C. Nakane & S. Oishi) University of Tokyo Press, 1990,
Home Bound: Studies of East Asian Society, (Ed. C. Nakane & C. Chiao), The Center for East Asian Cultural Studies, Tokyo, 1992
Recent Trends of Mongolian, Tibetan and Vietnamese Studies, (Ed. Chie Nakane), *Acta Asiatica*, Bulletin of the Institute of Eastern Culture, 76, 1998

論文

チベット史における年代基準の決定について 『東洋文化研究所紀要』第五冊 一九五四
Tripura 州原住民に關する民族學的調査報告 『民族學研究』第十九巻第一號 一九五五
Changes in Matrilineal Families in Assam, *Transactions of the Third World Congress of Sociology* Vol. IV, International Sociological Association, 1957
Sikkim における複合社會 (Lepcha, Bhutia, Nepalee) の研究 『民族學研究』第二二巻第一・二號 一九五八
ナヤールの母系大家族制の崩壞について 『東洋文化研究所紀要』第十四冊 一九五八
民族學研究におけるインドの位置 『社會人類學』第二號 一九五八
Cross-Cousin Marriage among the Garo of Assam. *Man* Vol. 58, No. 2. 1958
家族 (第二章)、親族 (第三章)、『人間の社會』〔I〕 現代文化人類學三 (泉靖一・中根千枝編) 中山書店 一九六〇
The Nayar Familiy in a Disintegrating Matrilineal System, *International Journal of Comparative Sociology* Vol. 3, No. 1, The Department of Social Anthropology, Karnatak University, E. J. Brill, Leiden, 1962
南西諸島の社會組織 序論 『民族學研究』第二七巻第一號 一九六二
日本同族構造の分析――社會人類學的考察 『東洋文化研究所紀要』第二八冊 一九六二
母系制の構造分析 『民族學ノート』岡正雄教授還暦記念論文集 平凡社 一九六三
「ヒキ」の分析――奄美雙系社會の血緣組織 『東洋文化研究所紀要』第三三冊 一九六四
「家」の構造分析 『石田英一郎教授還暦記念論文集』 角川書店 一九六四
チベット「一九六三年の歴史學界」『史學雜誌』七三編五號 一九六四
A Plural Society in Sikkim—A Study of the Interrelations of Lepchas, Bhotias and Nepalis, *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon—Anthropological Studies in Hindu-Buddhist Contact Zone*, Ed. Christoph von Fürer-Haimendorf. Asia Publishing

House, Bombay, 1966
ヒンドゥ「家族」の實態とその構造分析『東洋文化研究所紀要』第四三册 一九六七
東洋における基層文化の性格——中國・インドとその周邊諸社會『講座東洋思想 九』東洋と西洋Ⅱ 東京大學出版會 一九六七
西歐文化受容における諸問題——インドと日本の場合『講座東洋思想九』東洋と西洋Ⅱ 東京大學出版會 一九六七
門中と村落（プレリミナリー・リポート——沖縄今歸仁村與那嶺『社會と傳承』第一〇卷第四號 一九六七
Traditional Pattern of Authority and Leadership in Japan, *Leadership and Authority—A Symposium*, Ed. Gehan Wijeyewardene, University of Malaya Press, 1968
「家」の構造——社會人類學的分析『東京大學公開講座一一「家」』東京大學出版會 一九六八
インドの文化『岩波講座「哲學」：文化』岩波書店 一九六八
門中と村落——今歸仁村與那嶺『東洋文化』第四八・九號 一九七〇
The Anthropological Study of Japan, *Rice University Studies* Vol. 56, No. 4. William Marsh Rice University, Houston, Texas, 1970
Sociology and Social Anthropology in a Complex Society-Some Examples from Japan, *Transactions of the Sixth World Congress of Sociology* Vol. 3. International Sociological Association, 1970
Japan: The Modern Miracle, *The Times History of Our Times*, Ed. Marcus Cunliffe. Weidenfeld & Nicolson, London, 1971
チベット農民の實態について『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社 一九七二
An Interpretation of the Size and Structure of the Household in Japan over Three Centuries, *Household and Family in Past Time: Comparative Studies in the Size and Structure of the Domestic Group over Time*, Ed. Peter Laslett, Cambridge University Press, 1972
Social Background of Japanese in Southeast Asia, *The Developing Economies* 10-2. Institute of Developing Economies, 1972
沖縄・本土・中國・朝鮮の同族〝門中の比較『沖縄の民族學的研究—民俗社會と世界像』日本民族學會（編） 一九七三
文化による親子關係の相違『東京大學公開講座 一七「親と子」』東京大學出版會 一九七三
Cultural Anthropology in Japan, *Annual Review of Anthropology* Vol. 3. Palo Alto, California, 1974
歴史學と社會人類學『歴史と地理』二三三號 世界史の研究（八二）山川出版社 一九七五
社會人類學と東アジア『民族學研究』第三九卷第四號 一九七五
韓國——その社會人類學的位置づけ『朝鮮學報』第七五輯 一九七五
Fieldwork in India-A Japanese Experience, *Encounter and Experience: Personal Accounts of Fieldwork*, Ed. Andre Beteille & T. N. Madan. Vikas Publishing House, Delhi, Bombay, 1975
酒と社會『東京大學公開講座二二「酒」』東京大學出版會 一九七六
A Comparative Analysis on Sociological Contexts in Asia, *East*

Asian Cultural Studies Vol. 16, Nos. 1-4. The Center for East Asian Cultural Studies, 1977

Continuity and Change in Social Structure in the Process of Industrialization—Japan and India Contrasted, *Proceedings: Symposium on Cultural Continuity in Social Economic Change-India & Japan* (Modern and Current Periods) The Department of Sociology, Calcutta University, 1977

騎馬民族説とタテ社會論『江上波夫教授古稀記念論集：民族・文化編』山川出版社　一九七七

Cultural Implications of Tibetan History, *Himalayan Anthropology —— The Indo-Tibetan Interface*, Ed. James F. Fisher, Mouton Publishers, The Hague, Paris, 1978

社會人類學『教育學大事典』第一法規出版株式會社　一九七八

A Comparison of Social Organization in East Asian Societies, *Proceedings: The VIIth International Symposium*, Sep. 4-8, 1979. National Academy of Sciences, Republic of Korea 1979

An Interpretation of Japanese Social Systems in a Comparative Perspective, *European Studies on Japan*, Ed. Ian Nish & Charles Dunn, Paul Norbury Publications, Tenterden Kent 1979

Japan: An Asian Reflex, *Anthropology: Ancestors and Heirs* (Studies in Anthropology 5), Ed. Stanley Diamond, Mouton Publishers, The Hague, Paris 1980

An Organizational Comparison between Japanese and Southeast Asians, *In Search of Meaningful Cultural Exchange —— Southeast Asia and Japan* Japan Foundation Reference Series 5　1980

社會學的認識——日本と東南アジアの比較『實りある文化交流を求めて——東南アジアとの交流を考える』國際交流基金叢書五　一九八〇

東南アジア的社會構造の特色——人間關係についての一試論　山本達郎博士古稀記念『東南アジア・インドの社會と文化』（下）山川出版社　一九八〇

集團構造の比較『日本と中國』（天城シンポジウム記錄）小學館　一九八一

ダライ政權をめぐるチベット貴族のネットワーク『東洋文化研究所紀要』第八七册　一九八一

The Effect of Cultural Tradition on Anthropologists, *Indigenous Anthropology in Non-Western Countries*, Proceedings of a Burg Wartenstein Symposium, July 15-24, 1978 Ed. Hussein Fahim, Carolina Academic Press, Durham, North Carolina 1982

Introduction: Ritual and Society, *East Asian Cultural Studies* Vol. 22, Nos. 1-4　The Center for East Asian Cultural Studies 1983

社會人類學——社會組織——アジアを中心に『日本の民族學一九六四～一九八三』日本民族學會編　弘文堂　一九八六

技術協力と異なる社會の對應『國際協力研究』第二卷第二號　一九八六

社會人類學とフィールドワーク「UP」一七七號一九八七、東大出版會

〝民族〟〝民族問題〟の虚構『學術月報』47—11、日本學術振興會、一九九四

仲宗根政善先生と與那嶺『沖縄文化研究』22、法政大學沖縄文化研

究所、一九九六
"Japanese Society: Continuity and Change" in *Tradition and Modernity: India and Japan Towards the Twenty-First Century* Ed. Hiroshi Yamaguchi and Haruka Yanagisawa, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. New Delhi, 1997. pp. 111-120.
「チベットの社會構造を探る――果洛牧民社會の分析をとおして――」『東方學論集』東方學會、一九九七
「チベット問題の社會的背景」『日本學士院紀要』五二卷、一號、一九九七
學術の國際協力の觀點から『學術月報』50―11、日本學術振興會、一九九七
事實と理論の間『最終講義』實業之日本社、一九九七
日本の對外協力における光と影『學士會會報』八一八號、一九九八
"India and China: Perceptions of a Japanese Anthropologist" *IIC Quarterly* Spring, 1998, India International Centre, New Delhi.
"Introduction" and "New Trends in Tibetan Studies: Towards an Elucidation of Tibetan Society" in *Recent, Trennds of Mongolian, Tibetan and Vietnamese Studies* (Ed. Chie Nakane), *Acta Asiatica* Bulletin of the Institute of Eastern Culture, 76, 1998.
財團法人民族學振興會の解散について『民族學研究』64、一九九九
財團法人民族學振興會と澁澤敬三『青淵』四月號、二〇〇〇
"Introduction" in *Towards Understnding Each Other: Fifty Year's History of India-Japan Mutual Studies* (Ed. Chie Nakane and Masao Naito), Committee for Japan-India Academic Exchange, Tokyo, 2000, March.

「山本達郎先生のお人柄と國際的對應」（追悼文）『東方學』第一〇二輯　二〇〇一
「カースト――その多樣性と變移性」（Caste—Its Diversity and Fluidity）『日本學士院紀要』五六卷二號　二〇〇二年一月
「江上波夫先生を偲ぶ」『東方學』第一〇五輯　二〇〇三
「チベットの政教合一制の展開過程」『日本學士院紀要』六一卷三號　二〇〇七年三月
「中國與印度：從人類學視角來看文化邊陲」（"China and India: An Athropological view in Relation to Cultural Peripheries"）『北京大學學報（哲學社會科學版）』四四卷二期　二〇〇七年三月